

平成 29 年 4 月 28 日

好文木「なぜ、「やればできる」は魔法のことばなのか」

ゴールデンウィークを前に、昼休みのグラウンドは生徒たちの笑顔と笑い声で満ち溢れています。実に気持ちの良い季節です。

昨日、午後から高校第二校長部会で行っている間に校長ポストに匿名の手紙が入っていました。読んでみると次のように書かれていました。「先生はここだけは誰にも負けないってところありますか？ 私は自己嫌悪、自己否定ばかりで一つも見つかりません。自分に自信を持つ方法ってありますか？」

ちょうど週刊ダイヤモンド 4 月 22 日号の特集記事「孫家の教え」を読んでいる最中で、私が本校のキャッチフレーズとして造った「やればできる」という言葉についての専門的な解説があり、改めてその正しさを再確認していたところなので、その説明も交えて、彼女の質問に答えようと思います。

まず、第一の質問、私がここだけは誰にも負けないというところは、我慢強いところ、諦めの悪いところかなと思います。挫折にめげないとまで断定する自信はありませんが、めげ難いとは言えると思っています。もともと小さい頃はとても神経質でした。その片鱗は今も残っていますが、失敗や挫折をしても大事に至らなかったり、その失敗から学んで次に活かし成功に導けたりした経験が積み重なってくると、困難に出会っても「山よりでかい猪は出ない」と慌てなくなります。前回も乗り越えられたのだから、今回も何とかできるだろうという自信が湧いてくるのです。第二の質問の自分に自信を持つ方法は何か？それは失敗する勇気を持つことではないでしょうか。失敗したからと言って命まで取られるようなことはめったにありません。

ダイヤモンドの特集記事では、「やればできる」と信じるのが成長に繋がる鍵であると説明しています。自分ならできるという気持ちを自己効力感というそうです。これは心理学者アルバート・バンデューラ氏が提唱したもので、「やればできる」と思っている人ほど、上手くゆく傾向にあるという理論です。その力を最も伸ばす方法は「成功体験」だといいます。私は好文木を纏めて冊子にしていますが（現在 PARTⅢを制作中）、そのタイトルは「努力に勝る天才なし」です。わたしはこの言葉が好きなのですが、米スタンフォード大学の心理学者キャロル・ドゥエック教授によれば、「人間の基本的資質は努力次第で伸ばすことが出来ると信じている人」と「変わらないと考えている人」の間では成長の仕方に差が出るのだそうです。前者を「成長思考 (growth mindset グロースマインドセット)」、後者を「固定思考 (fixed mindset フィックストマインドセット)」と呼びます。成長思考の人は、自分をどう向上させるかに関心を持ち、失敗しても成長の機会と前向きにとらえるが、固定思考の人は他人からの評価ばかりを気にするので、「どうせまた失敗する」との思いが先行して一歩踏み出せないのです。

この「孫家の教え」特集では、ソフトバンクグループの創業者、孫正義氏の弟の孫泰蔵氏が孫家の教えを引き合いにイノベーターが育つ理想の教育を語っています。孫家の教育方針は、①他人に倣うな②責任を与えよ③褒めちぎれ④ユーモアを交える、この四つだったそうです。その他 27 名の 30~40 代の若手起業家のインタビューも載せています。彼らに共通しているのは、高校や大学での具体的な勉強の仕方や教わり方ではなく、父親や母親あるいは祖父母からの言葉の影響です。「中学や高校では、何になるかよりも、どう生きていきたいのかという、自分の芯を育てることに時間を使いなさい」という母の言葉が胸に響き、高品質の手編みセーターで東日本大震災の復興に尽くす 32 歳の女性社長、町工場を営んでいた祖母から「どんなつらいときでも、ピンチのときでも何とかなる。諦めず、常にできるとっておきなさい」と言われ、そこから失敗を成長の糧にしていっていったというテクノロジーを武器に介護現場を最適化する会社の CEO となった 32 歳の男性。母親と 2 歳下の妹と 3 人暮らしだった男性は、普段なかなか会えない母親の「勇気とは、恐れを抱かないことではない。恐れを抱いて



も行動する度胸があることだ」との教えを強く胸に刻み、スマホを使い健康管理をする会社を立ち上げました。また、もう一つの共通点は読書です。小学3年生から野口英世やマリー・キュリーなどの偉人の伝記を読みふけったり、小学校高学年で司馬遷の歴史書「史記」に没頭したり、読書を通じて叡智に触れ勇気を得ているのです。

人を変えるのは、成功に導くのは、システムやカリキュラムではなく、生き方に対する深い洞察だということが分かります。

平成29年5月1日

好文木「花に思い、人进行う」

今年は例年に比べ気温が低かったのか、桜の季節が長く楽しめました。私たちが楽しむお花見の桜は多くがソメイヨシノです。ソメイヨシノはオオシマザクラとエドヒガンの交配で作られたとされ、江戸時代後半から明治にかけて全国に広がったそうです。もともと自生していたのはヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンなどです。ソメイヨシノは10年も経てば立派に花を付けるようになり、寿命は50~70年だそうです。苗木から植えれば、主が亡くなる頃には桜も枯れるのですが、葉と花が同時に出るヤマザクラは寿命が長いので世代を超えて見守ることができる桜だそうです。大規模なソメイヨシノの並木でのお花見も良いのですが、一本のヤマザクラを眺めるのも趣があります。



私の自宅から歩いて数分のところに長い間空き家のままとなっていた大きなお屋敷がありました。その門の前に見事なヤマザクラの大木があり、毎年満開の花を咲かせていました。しかし、昨年からのマンション建設が始まり、あっさりと取り払われてしまったのです。シンボルツリーとして残す方法はなかったのだろうかと思いに残念に思います。その代りというにはあまりに規模が小さすぎるのですが、我が家の庭のヤマザクラがだいぶ育ってきて今年はかなり花を咲かせてくれました。椅子に腰かけて本を読んでいると、ハラハラと白い花びらが舞い降り肩にかかりました。この桜、西行の歌に魅了され、私もまた何時の日か「花の下にて春死なむ」と思い、10年ほど前に植えたものです。あの見事だったヤマザクラのようになって世代を超えて眺めることが出来ると良いなと思いました。

先週末、友達との関係が上手くゆかなくなっていて悩んでいる生徒の話をたまたま続けて2人から聴くこととなりました。ともに大きなトラブルがあったわけではなく、自分と合わない部分が出てきて何となく疎遠になったり、逆にいろいろ言われるのが煩わしくなったりして、彼女たちにはそれがストレスになっているようでした。自分の正直な気持ちを相手に伝えることでお互いのわだかまりが解消してスムーズなコミュニケーションが出来るようになればよいのですが、人間関係というのはなかなか難しく理屈通りにはゆきません。何でもかんでも話せばわかるというものでもありません。

しかし、こういうことで悩み学校生活が面白くななくなっているのは残念です。他に目指すべき目標や探すべき何かがあるのですから、そちらに目を向けるべきです。私は「去る者は追わず、来る者は拒まず」といいますか、友人とは広く浅く付き合ってきたように思います。人は、今が永遠に続くと考えるので、友人関係についても期待もすれば苦痛も感じます。しかし、それは人生の一時期にしか過ぎません。高校から大学そして就職すれば友人も変わります。「今の二人の関係で、相手が特にストレスを感じておらず、自分だけがストレスを感じているなら、無理に相手を自分に向ける方向に持ってゆこうとせず、付き合いの濃さを徐々に薄めて行けばいいのではないかと

な。今まで仲良かったのに最近そっけなくなったということでその理由が知りたい気持ちも分かるけど、人間、好みが変わることはよくあるので、話し様によっては相手を問い詰めるようなことにならないとも限らず、反って関係を悪化させてしまうことになる。どうしても話ししないと納得できないというならやってみてもいいと思うけど」と私の考えを述べました。

休み明けの今日、その内の一人の生徒に会ったので、「ところで、この前の件、友達に話してみたの？」と訊いて見ましたら、「いえ、もういいかなと思って」というので、すかさず「それでいいんじゃないの」と答えました。お互いが硬くなりすぎると收拾がつかなくなります。ときには上手に受け流す術も必要です。そして、自分にとって今何が一番大事かという優先順位をつけることができれば、こういう問題にかかわってストレスをためることも無くなると思います。

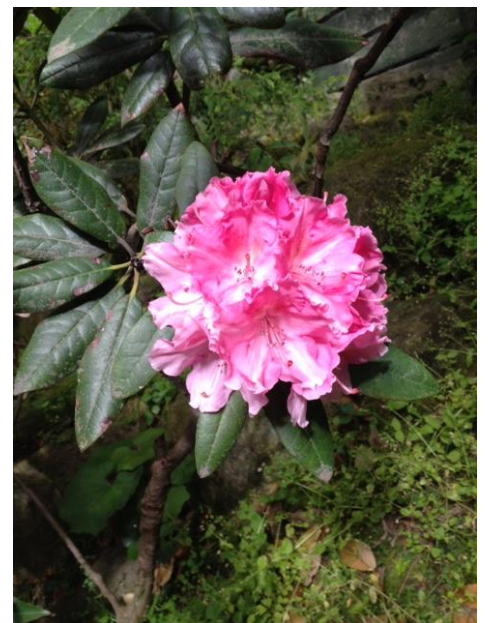
この好文本を書いていると、校長ポストに手紙が入れました。読むと、「自分に自信が持てないがどうしたらいいですか？」との手紙をくれた生徒からでした。「好文本見ました。お返事有難うございます。すこしずつではありますが自分らしさとかを見つけないかと思っています。失敗するのはダメなことじゃないんですね。これからは失敗をおそれずに色々なことにチャレンジしていこうと思います」とありました。とてもとても嬉しく思います。

平成 29 年 5 月 13 日

好文本「はじめに言葉ありき」

今朝は通学時間帯が大雨となり、靴やスカートをびしょびしょにしながらも生徒たちが登校してきました。いつもながら、気の毒だなと思います。靴下やスカート、ブラウスが濡れたまま授業に入るのは気持ちよいものではありません。

校門での挨拶も、大屋根の雨どいから滝のような雨が流れて傘を差さないと濡れてしまう状態でした。強面の生徒指導の若手教員が、生徒たちを玄関の中に入れてそこで挨拶する様に誘導しました。めずらしく気を利かしてくれたなと思い、「やさしいじゃない」と冷やかしました。この教員、本当はやさしい生徒思いの教員なので多くの生徒から慕われているのですが、シャイな性格の裏返しなのか、いかんせん言葉と目つきが少々きついので、「口が悪い、目つきが怖い」と、初対面の生徒には誤解されやすいのです。生徒から度々苦情を聞き、本人に指導するとともに生徒にはこの教員の良さを話してきました。最近は大分マイルドになってきたようです。将来を期待しているので一皮も二皮も剥けて大局的にものを見ることが出来る教員になってほしいと思っています。



以前、とても寒い風の強い日に門のところで生徒たちが挨拶していました。寒がりの私は言うに及ばず教員はほとんどみなコートを羽織っています。私は生徒たちを玄関の中に入れるように言いました。私はダウンコートを着ていても寒くて足踏みしていたぐらいですから、コートも着ずに立っている生徒はさぞかし寒いことだろうと思ったのです。この状況で戸外で挨拶する必要はありません。玄関を入ったロビーで十分です。今回は私が言う前に彼が適切な判断をしてくれました。ちょっとしたことなのですが、このような気配りは人を教え導く立場の人間には身に付けてほしいものです。

授業においてもクラブ指導においても注意しなければならないのは「言葉」です。教員の発する何気ない言葉で甚く傷つく生徒がいます。私のところにも時々この種の訴えが寄せられます。言葉は人を勇気づけもすれば、

傷付けもします。指導そのものが如何に正しくとも、発する言葉によって真意が正しく伝わらず、逆に人間関係を壊す結果になる場合があります。言葉は人を動かす力を持っています。正に働く場合もあれば、負に働く場合もあります。言葉は一度口から出れば取り消すことが出来ません。昨今の国会論議を見ていると言葉の軽さ、言葉遊びの酷さが目につきます。驕りによる真摯さの欠如だと思います。言葉は物事のあり様を認識する上で必要です。だから、正しい言葉を使わなければ正しいあり様は認識できません。論理的思考も言葉からです。なればこそ、我々は言葉の大切さを身を以て生徒たちに伝えて行かねばならないのではないのでしょうか。「はじめに言葉ありき」と、常に意識してほしいものです。

平成 29 年 5 月 23 日

好文木「匿名の生徒の質問に答える」

今朝、いつものように校門での挨拶を終えて戻ってくると、校長ポストに一枚の匿名の手紙が入っていました。「ずっと思っていたのですが、好文の先生はもっと周りを見てから生徒に注意してほしいです。みんながみんなそういうわけではありませんが、勝手に勘違いされて怒られたり注意されたりして生徒も気が悪いです。何もしていないのに怖い顔で上から下まで見られて感じ悪いです。先生が言ってることはすべて正しいのですか？生徒の意見をちゃんと聞いてほしいです」

先日、1年生の一泊研修の折、匿名で入っていた手紙の返事をこの好文木を通して返したことを話し「何かあればいつでも」と言いましたので、多分1年生の生徒が、私の返事を期待して投書をくれたのだと思い、以下に私の考えを述べたいと思います。

何分具体的なことが書かれていないので、推測の域を出ないのですが、ただ、この10年間、同じような意見を何度ももらい、その都度、直接生徒や保護者にも話をしてきたので、おそらくそう大きく的外れていないと思います。まず、「ずっと思っていたのですが、」というところからすると、かなり不満が溜まっているのでしょうね。また文面から想像すると、数人の先生に対して不満があるように思います。「勝手に勘違いされて」ということですが、先生が本当に勘違いしていた場合と生徒が先生の真意を理解できていない場合と両方あると思います。かつて私も勘違いで注意したことがありますが、すぐに間違いに気づき「ごめん」と謝りました。生徒が間違っている場合には、生徒がきちんと理解できるように話をしてきました。

数年前ですが、こんなことがありました。玄関のところで、ジュースを飲みながら帰ろうとしていた1年生がいたので、「ジュースはレストランで座って飲んでから帰りなさいよ」と注意したら、キョトンとした顔をしました。そこで、「あのね、最近は大人でも食べ歩きをする人が多いけど、それはお行儀が悪いことなんだよ」と言いましたら、「ああ、そうなんですか。わかりました」といって、素直にレストランまで戻ってジュースを飲んでゴミ箱に捨ててからその生徒は帰りました。

5~6年程前の寒い冬の朝、こんなこともありました。私は阪神電車で通勤していますが、千船駅に降りる直前で、少し離れた席に本校の生徒が座っているのに気が付きました。「あじゃ」と思ったのは、スカートの下に体操服の長ズボンを穿いていたのです。化粧したりブラウスのボタンをはずしたりしているのではなく体操服のズボン以外はきっちりしているのです。千船駅で電車のドアが開いたとき、「おはよう」と先ず声をかけました。



そして、「スカートの下に体操服のズボンは頂けないね」というと、「山の方から来ているので寒かったもので」と答えました。「そうだね、今朝は特に寒いね。気持ちは分かるけど、その格好は良くないよ。寒ければタイツを穿きなさい。その格好のまま駅から学校まで行くのは良くないから、トイレで脱いできなさい」というと、素直に駅のトイレで脱いで出てきました。学校まで彼女と一緒に歩き出すと、「この件はやっぱり担任の先生に報告されて指導になりますね」と訊いてきたので、「ぼくがきちんと指導して、君も間違いに気が付き直したのだから、これで終わりだよ」と言いました。その後、中学の事や将来の希望などいろいろ話を聴きながら学校に向かいました。

昼休みや放課後レストランでジュースを買って歩いている生徒を良く見かけますが、パックを持っているだけなら誰も注意はしませんが、ストローを差し込んでいると、「飲みながら歩くなよ」と注意されることがあるでしょう。本人はもしかしたら飲んで歩いてはいないかもしれませんが、しかし、ストローを差し込んでいれば、飲んでいられると思われても仕方がありません。

中国の格言に「瓜田（うでん）に履（くつ）を納（い）れず、李下（りか）に冠（かんむり）を正さず」という言葉があります。瓜（うり）の田んぼで靴を履き直していると、瓜を盗もうとしているのではないかと疑われ、李下（スモノの木）の下で頭にかぶっている冠を直そうとしていると、李を盗もうとしていると疑われる。もともと、時の王様の言動を諫めたものなのですが、広く疑いを招くような言動は慎みなさいという意味で使われるようになりました。

そういえば、今年の流行語大賞に選ばれそうな「忖度（そんたく）」（人の気持ちを推し量ること）が本来は前向きな意味の言葉であるにもかかわらず、相手の意向を汲んでその意向に沿えるよう物事を有利に運ぶといったずるいイメージが広がっているのも、為政者の「李下に冠を正す」と取られても仕方がない言動によるところ大であり誠に残念に思います。

昨今は生徒と教員の間でもタメ口で話をする風潮がありますが、物事を教わる生徒と教える教員とは師弟関係にあり、生徒もまた少なくとも肝心なところではその立場の相違を弁えた礼儀は守らねばなりません。一方、教員もまた、立場が上だからといって、生徒を見下したりぞんざいな言葉を使ったりすることは実に慎まなければなりません。コミュニケーションの成立を阻害することになります。「寝ていて人を起こすな」という言葉がありますが、挨拶、マナーを生徒に指導する身なれば、率先して挨拶し TPO に合った身だしなみとマナーを身を持って示してください。そして、生徒に指導をする場合には「何故そうしなければいけないか」ということを相手が分かるように丁寧に説明をして頂きたいと思います。如何に正しいことを言おうとも、信頼関係がないところにコミュニケーションは成立しません。信頼関係はどうしたら生まれるのか、それは傾聴と共感の姿勢であり、公平な指導であります。その前提があってこそ、「ダメなものはダメ」と言えるのです。

匿名の生徒さん、私の考えとメッセージ理解してもらえたでしょうか。もし、まだ納得がゆかないことがありましたら、今度は直接お話を致しましょう。いつでも校長室はオープンですから。

平成 29 年 5 月 31 日

好文本「説明責任と納得性」

今、政治の世界で事の正否にかかわらず、「説明責任」と「納得性」が失われつつあるように感じます。私は教育の場においても「説明責任」と「納得性」は極めて重要だと考えています。10 年前、校長に就任し学校改革に着手した時、生徒指導において最も重視すべきこととしてこの二つのことを教員に申し渡しました。

理由も説明せず、十分納得も出来ていない中で生徒を従わせようとするのは間違いです。それでは学びにつながりません。我々大人が、教師が常識として理解している事でも、子どもは、生徒は分かっていないということは沢山あります。きちんと説明をし、生徒の疑問や反論に答える中で、社会を知り道理を考える力を育てることが出来ます。政府が推進する教育改革の目標にも掲げられている論理的思考力や問題解決能力は教科学習だけでなくこういったところから育成できるものです。

校長室をオープンにし、校長ポストを設置しているのも同じ理由からです。進路や人間関係の悩みの相談もあれば、学校生活での要望もあります。どんな些細な相談、要望にも丁寧に答えるようにしています。校長ポストに手紙をもらうと、内容によって手紙のときもありますしメモのときもありますが文章で返事をしています。生徒も文章を書くときには色々考えたでしょうが、私も文章で返事をするときは考えます。時には生徒の言うことが正しいと思えることもあります。「負うた子に教えられて浅瀬を渡る」ことだってあります。その場合は、担当分掌の長を呼んで論議し改善を図ってきました。

残念ながら、教員の対応につき生徒や保護者から苦情をもらうことがあります。大抵は初期対応に丁寧さを欠いていた結果です。熱心な先生の場合でも、相手が理解できる言葉で話さなければ真意が通じないばかりか誤解を招くこともあります。分掌間の連絡ミスで担当者に話しがきちんと伝わってなくてトラブルになる場合もありますが、校内事情を言い訳にすることは愚の骨頂です。それは生徒や保護者には関係のないことです。ビジネスで相手方とトラブルになったとき、「いやあ、それは工場の問題で」とか「その件は営業から聞いていなかったもので」なんて答えられたら、「それは貴社の内部の問題で当社には関係ない」と、なりませんか。

私は「教育は義理と人情と浪花節」をモットーにしています。物事の道理（義理）をしっかりと教え、愛情（人情）をもって接し、合理的ではない心のつながり（浪花節）あってこそ信頼は生まれると考えています。生徒に対する愛情を持っていることが、教師としての必要条件だと思います。愛情があれば、小さなサインも見逃しません。かける言葉も変わります。説明責任と納得性が確保され生徒や保護者とのコミュニケーションが成立します。コミュニケーションの成立無くして信頼は生まれません。信なくば立たず、教育は成り立ちません。そしてなによりも生徒は、その先生に愛情があるかどうかは常に正しく感じ取っていると私は思います。



平成 29 年 6 月 14 日

好文木「好文木 10 年」

好文木を書き始めてから 10 年が経ちました。5 年経ったときに「努力に勝る天才なし」という私の好きな言葉をタイトルとして一冊の冊子にまとめました。8 年が経ったとき PARTⅡ を出しました。そして今回 PARTⅢ の刊行となりました。

10 年間で No.1 の「新入生の皆さんのチャンス・メーカーに」と題した平成 19 年度入学式式辞から No.390 の「シンビジウムの意地」(2017 年 4 月 19 日)まで計 390 の話題の掲載となっています。平均毎月 3 回ペースということになりますが、基本、書きたいときに書いていますので多い時は月 6 回の場合もありました。一回目の平成 19 年度入学式式辞は 3 月 15 日付となっていますが、おそらく初めて校長となり入学式を迎えるに当たり随分前から用意をしていたものと思います。今は入学式と卒業式の式辞は 2 週間ほど前から考えだし、前日まで場合によっては当日の朝まで推敲するのが常となっています。

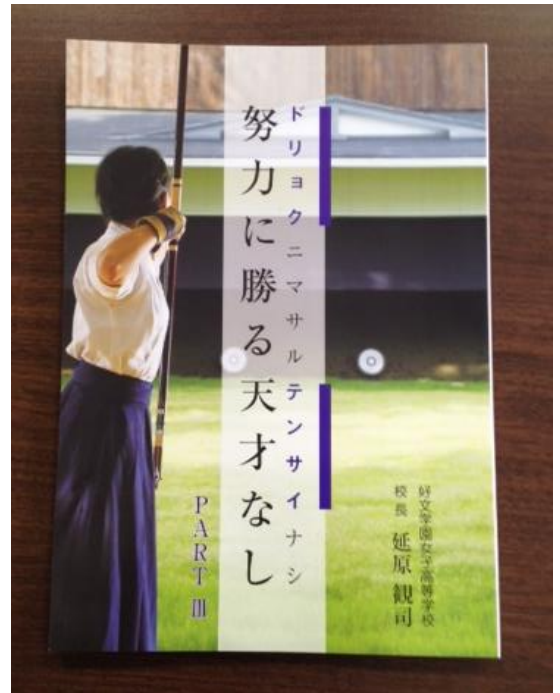
もともと、入学式・卒業式の式辞や始業式・終業式の挨拶を纏めようとして書き出したのですが、生徒指導など校務についての考え方や社会一般に関する所見を書くようになりました。読者は本校の生徒や保護者そして教職員を念頭に置いているのですが、他校の先生方や一般の方も読んでくださっているようです。先日も消防署の司令の方が「読んでますよ」とおっしゃってください、驚くとともに嬉しく思いました。

卒業生の保護者で愛読して下さっている方によれば、話しの内容で私の精神状態なり学校の状況の良し悪しが良く解るそうです。「最近、先生方の指導に苦勞されているそうですね」とか「学校上手くいっているみたいですね」とかメールを頂くことがあります。有難いことです。しかし、それだけ私は単純明快な人間なのだと思います。

掲載されているものを読み返してみると、初期の写真と現在を比べてみると、白髪がだいぶ増え年相応に老けてきたなと思います。しかし、文章は相変わらず青臭いところがあります。そのなかで、自分で書いたものにもかかわらず何度読んでも目頭がジーンと熱くなるものがあります。2009 年 8 月 5 日付の「超人を目指して飛ぶ一本の矢」です。このタイトルは、ニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』から採ったものです。

全国高等学校総合体育大会弓道競技大会(奈良県立橿原公苑第一体育館)に大阪代表として出場した本校弓道部主将、伊藤杏奈さん(平成 22 年卒)のエピソードです。チームが団体戦で予選敗退した後、個人戦でただ一人準決勝に進んだ彼女は、腰痛のため這うようにして登校していたにもかかわらず、(校門に立っていた私は彼女が門柱に寄りかかりながら登校してくる姿を眼にしていました)ピンと背筋を伸ばしチームの威信と自らのプライドを掛けて弓を引き続け決勝に残り 5 位に入賞しました。翌朝、宿泊していた別館 2 階の旧作法室を覗くと、広い和室に敷かれ布団の中で彼女は休んでいました。その場の静寂は自然と私の声を低くさせました。「お疲れ様。頑張ったな」 半身を起こして私の方を見た彼女は「こんな恰好のままですみません」と答えました。昨日とは打って変わった彼女の弱々しい姿に、私の口をついて出た言葉は「おめでとう」ではなく「ありがとう」でした。「ゆっくり休んで」という次の言葉はもう涙声になってしまいました。溢れる涙を我慢しながら校長室に戻る階段を下りたことを懐かしく思い出します。

私が大変懇意にしているある私立高校の校長先生から、「いつも延原さんの好文木を楽しみに読んでいます。苦しい時にね、好文木と紙に字を書きながら自分を奮い立たせているのです。勇気をもらっているの



ですよ」と伺ったことがありました。私のつたない文章に、そのように言って頂けて有難く恐縮した次第ですが、実は私自身が好文木を書くことによって自分を鼓舞しています。一流の人間なれば不言実行となるのですが、そこは残念ながら私ですから有言実行で自分にプレッシャーを与えながらストレスを跳ね返そうとしているわけです。

冊子「努力に勝る天才なし」の表紙は、伊藤さんの1年先輩で平成21年卒業の弓道部17期主将、狩野智美さんが本校弓道場で弓を射る後姿です。「好文学園かくあらん」と思う、私が一番気に入っている写真です。

平成29年6月16日

好文木「アルカイク目指して、進め好文ガールズ！」

来る9月30日（土）、尼崎アルカイクホールにて開催される文化祭“好文明華祭”の舞台公演を賭けた選考会が、昨日第一体育館で開かれました。アルカイクホールでの公演は今年で9年目となります。午後から約3時間、第一部は選考会を通過したクラス（6～7クラス）の公演を行い、第二部は軽音楽部、合唱部、演劇部、ダンス部、吹奏楽部の5クラブが公演を行うのが恒例となっています。

1年生5クラス、2年生3クラス、3年生6クラスの計14クラスがエントリーし、公演内容のプレゼンテーションを行いました。審査は、テーマに則しているか、団結力かどうか、本番への期待度の3項目を評価基準とし、私を含めた17人の教員で行いました。その結果に、事前に提出されている企画書の評価も加えて最終的な順位が決められます。



今年は、1年生3クラス、2年生1クラス、3年生2クラスが上位6クラスに入り、晴れてアルカイクホールでの公演権を手中にしました。今朝の朝礼前に、校内放送にて生徒会長から結果発表が行われると、クラス名が呼ばれるたびに大きな歓声が上がり校長室にまで聞こえてきました。毎年のことですが、歓声が上がるのは明華祭でのアルカイク出演がクラスの大きな目標になっている証であり、生徒たちの関心の高さを示しています。

出場できるクラスをもっと増やしたらどうか、本番での公演に順位を付けるのはどんなものか、審査基準と審査員は妥当なのか等々議論を重ねてきましたが、出場クラス数を増やすと公演時間が長くなりますし、公演内容の質も落ちる可能性もあります。賞を出すことは健全な競い合いによるパフォーマンスの向上につながります。現状では今のやり方で妥当ではないかと思えます。

選考会前は放課後にそれぞれプレゼンに向けて練習をしていました。傍を通りかかると、学年とクラス名を連呼してアピールするクラスもあり熱気を感じました。担任と生徒と一緒に楽しみながら練習をしている姿は、ほのぼのとして微笑ましいものです。クラスがアルカイクを目指して一丸となっている雰囲気が伝わってきました。このクラスは3年連続でアルカイク出場となりました。優勝に期待がかかります。また、今年の1年生は全体的におとなしいように感じていたのですが、2学年、3学年を抑え、最多の3クラスが出場となり秘めたエネルギーを感じます。1クラスのみ出場となった2学年ですが、生徒発案の面白い企画が最終的にどのように出来上がるのか楽しみです。各クラスとも本番に向けて更に演技に磨きをかけて最高のパフォーマンスを見せてほしいと思います。

平成 29 年 6 月 17 日

好文木「校長ポスト」

今年は校長ポストへのお手紙の投函が例年に比べると非常に多くなっています。レストランに設置されているアイスクリームの自販機に入れてほしい種類のお願いから生徒指導に対する疑問や個人的な悩みの相談まで様々です。どんなことでも生徒が自分の思いを校長に伝えようとしていることは良いことだと思います。今もまた手紙が入りました。開けてみますと、1 年生から補習についての注文です。早速、実態把握と改善策の策定を教務部にお願いしました。



ノートを一枚千切るかルーズリーフなら一枚外すかしてそこに書いて折りたたんで入れるのもあれば、可愛らしい便箋に精一杯の思いを書いて封筒に入れ、自分の学年とクラスそして名前をきちんと書いてくるものもあります。私としては出来れば名前をかいてほしいのです。なぜなら、返事を少しでも早く伝えたいからです。「校長先生に手紙を出したのに、返事がもらえない、何も変わらない」と生徒たちが思うとすれば、それだけ悩みや不満が長引くことになります。私はそのような状況は回避したいと思うのです。

私は匿名の手紙であろうとも、「怪文書」扱いはしません。むしろ危機感を持ちます。昨日も、遅刻指導に関する匿名の意見書が投函されました。内容は一々もったもでしたので、生徒指導部長を呼んで実情を確認しました。生徒指導部内の調査の過程で、生徒が特定されたので返事を書いて担任に持って行ってもらいました。実際はその生徒の友人が書いたものと分かり、本人が校長室に来てくれたので、直接返事をする事が出来ました。今朝、その二人の生徒がお礼と要望を書いた手紙を持ってきてくれました。遅刻指導に対するルールと教員間の共通認識の再確認を生徒指導部長にお願いしました。

初期対応を迅速に行うこと、生徒が納得できる説明を行うこと、そして言葉の重みを認識して話すこと、これらが為されなければ、生徒の信頼は得られず、コミュニケーションは成立しません。そして我々が目指す本当に生徒のためになる教育が出来なくなります。校長室をオープンにし、校長ポストを設置し、どんな声でも生徒の声を聴こうという姿勢は私の危機感から出たものです。政治も教育も「信なくば立たず」です。教員一同がこのことをしっかり認識し、分掌間の壁を越えて一人一人が進んでリーダーシップを発揮することを強く期待しているという私の気持ちは是非とも「付度」して頂きたいと思うものであります。

平成 29 年 6 月 26 日

好文木「AI の驚異と脅威」

6 月 25 日 NHK 特集「驚異の人工知能」を観て、人工知能（AI）が想像以上に凄まじい勢いで社会に浸透してきていることを知り驚きました。

囲碁の電腦戦では名人が二度にわたり AI に敗れています。名古屋では客の居場所を教える AI 搭載のタクシー会社の乗客数が増加しています。そのうち自動運転で運転手そのものが要らなくなるかもしれません。金融ビジネスにおいてもディーリングルームの主役は今や AI です。アメリカの刑務所では犯罪者の再犯率を AI が判定しています。

電腦戦で名人に勝利した AI の開発者は、なぜ AI が名人に勝てる力を持ったのか説明が出来ないと言います。700 万回という途方もない回数の対戦記録を組み込んだそうですが、そのデーターをどのように解析しどのような手を見出したのかプロセスがわからないそうです。定石とは異なる奇抜な手を打ってくるので名人も予想が出来ません。AI は開発者の手を離れてその能力を自家増殖してブラックボックス化しているのです。AI の進歩が人間にとって吉と出るか凶と出るか微妙なところですよ。



海外では AI 政治家を作る研究も始まっています。国民が何を求めているのか、国民はどう反応するか AI 政治家の方が生身の人間より正しい判断ができ、AI 政治家と国民との対話も考えられると開発者は言います。

安倍総理は加計学園問題に関して、なかなか納得のゆく説明をされません。先週末には、「1 校だけに限定したから誤解を生じたので、今後はもっと門戸を広げてゆきます」とご発言。しかし、それでは限定する項目をわざわざ書き加えた意味は何だったのだろうか。この説明には論理矛盾を感じます。AI ならこのようなことは起きないでしょう。

写真は京都、三室戸寺のハート形の紫陽花です。この紫陽花を見つけると幸運が訪れると言われているそうです。卒業生の保護者が送って下さいました。

平成 29 年 7 月 1 日

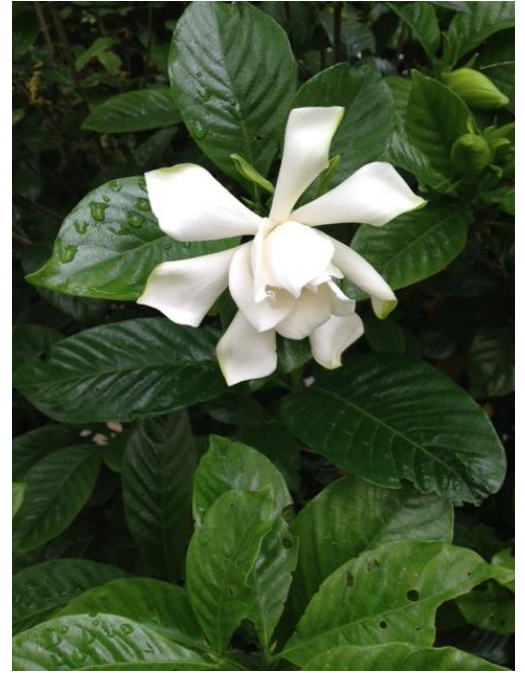
好文木「自省録」

通勤の行き帰りや校内で生徒たちに声をかけると、学校が楽しいとか先生が親切だとか明るく前向きに学校生活を送っている生徒が多いことに嬉しく思うと同時に安心するのですが、残念ながらすべての生徒がそうではありません。

校長ポストへの投書をきっかけで、生徒たちの想いに耳を傾けるなか、先日、ある保護者の方がおっしゃった「校長先生の考え方と現場の先生方の言動にギャップがあり、校長先生の考えが正しく伝わっていないのではありませんか」という言葉が身に染みしています。

何より私に直接想いを伝えて下さる保護者や手紙をくれたり話をしに来てくれたりする生徒たちに感謝しています。校長という立場は他の教員と比べると生徒や保護者との距離が遠くなります。悪くすると裸の王様になってしまいます。それでは「本当に生徒のためになる」教育は出来ません。オープンな校長室と校長ポストは、そのリスクを完全にゼロには出来ませんが、かなり低減させることが出来ていると思っています。

ある生徒が手紙の冒頭に「校長先生なら理解して下さると思い、この手紙を書きました」と記していました。会って話を聴いている時、彼女がぼつりと言った「期待は裏切りに変わるものです」という言葉に大きなショックを受けました。生徒にそう思わせてしまったことは痛恨の極みです。同じ思いをしている生徒が他にもいるかもしれません。私に手紙を出したり話をしに來たり出来ないあるいはしない生徒もいますから、彼女たちがどう思っているのかということに常に心を配らねばならないと自戒しています。一番大切なことは、生徒と教員のコミュニケーションが成立しており、信頼関係が築かれているということです。それを阻害する原因は大別すると以下の3つになると思います。



先ず、「言葉の荒さ」です。「おい、こら、おまえ」といわれて良い気持ちができる人はいません。運動部の部活を経験してきた先生は自分がそうだったので違和感がないのかもしれませんが、これはNGです。生徒は名前で呼ばれて初めて自分のことを認めてくれていると感じられるものです。教師と生徒が互いにリスペクトしあわなければ対話は成立しません。認められていないと感じている生徒に、何を言っても心に届きません。

次に、説明責任を果たしていないことです。「なぜそうするのか」ということを丁寧に説明せず結論だけを伝えている場合が多々あるようです。それが、誤解を生んだり時には反発を招いたりしてしまいます。最初に時間を掛けて丁寧に説明すれば、生徒は納得するのです。

そして、傾聴と共感の欠如です。聴いているつもりでも、ただ聞いて終わっているのではないのでしょうか。本当に聴いていれば、生徒の言い分にも一定の理を見出すことはでき、共感できるところもあるのではないのでしょうか。少なくともわたしはそうです。生徒が求めているのは傾聴であり聞き流しではないのです。「聴く」と「聞く」の違いを認識しなければなりません。

教師は教え導く側、生徒は教え導かれる側です。教え導く側だからこそ、より丁寧な言動と深い洞察力が求められます。生徒をして「期待は裏切りに変わる」と言わしめていたのでは校長として失格です。まだまだ私の想いが全ての教員に正しく伝わっていないのは不徳の致すところです。説き続けなければならないと感じています。

平成 29 年 7 月 7 日

好文木「夏休み 10 日！」

昨日から蝉が鳴き始め、いよいよ夏の到来です。本校では来週から期末考査が始まり、20 日には 1 学期の終業式となり、8 月 31 日まで夏休みに入ります。

最近、夏休みがどんどん短縮される傾向にあります。大阪の公立小中学校は 8 月 25 日が 2 学期の始業式です。以前より 1 週間短縮されています。学力向上のためだそうですが、「生徒たち、可哀そうだな」と思っておりましたところ、なんと、静岡県吉田町は来年度から公立小中学校の夏休みを 10 日にすると発表しました。10 日減らすのではなくたったの 10 日間にすると言うのです。理由は、教師の長時間労働を解消するため、平日の授業時間を少なくし、足りなくなる分を夏休み短縮でカバーするというものです。かつては、夏休みの短縮は、冬休みを長くとらざるを得ない分、夏休みを早めに切り上げる北海道などの寒冷地に限られていたものですが、大変な時代になりました。

ライフスタイルの変化により家庭や地域社会の教育力は著しく低下しており、その肩代わりを学校に期待され

ています。教員の仕事量は私たちが子供のころに比べるとかなり増えています。教師の仕事は子供に寄り添うものでビジネスの様に割り切れないため、超時間勤務が常態化しています。その上、政府が推進する教育改革において、グローバル人材育成を目指した小学校からの英語教育やプログラミングの採用など新たな負担が加わろうとしています。



吉田町は今年の夏休みも 24 日しかありません。教員の増員や仕事の内容、やり方の見直しなどは当然行った上での夏休み 10 日案だとしたら、これはもう異常事態だと思います。指導要領の改定でおそらく夏休みを短縮する学校はこれから増えてゆくと思います。欧米先進国では夏休みは 2 ヶ月が普通です。政府が推進しているグローバル人材育成の教育改革は創造性や感性が重視されるポスト工業化社会に沿った教育を志向しています。にもかかわらず、使うプラットフォーム（環境、基盤）が未だに知識や技術蓄積型の工業化社会のままであれば、システムは上手く機能しません。その結果、教師も子供もともに疲弊してしまいます。吉田町の夏休み 10 日案は、欧米のソフトを取り入れるなら欧米同様の環境整備が必要だということを示しているように思われます。

中央教育審議会の初等中等教育分科会は「学校における働き方改革特別部会」の設置を決めました。委員からは「保護者や地域への対応は勤務時間外にならざるを得ない」という意見がある一方「相当な強制力を持つ勤務時間の上限規程が必要だ」との意見が出ています。特に中学校では部活動の時間増加がクローズアップされています。

社会からの過剰な期待を受けた学校と教師はその期待に精一杯応えようとしてきたと思います。「教師も労働者だ」という言葉を自ら封印し児童・生徒のために尽くすことを生きがいとしてきた教師も沢山います。しかし、こういった教師の善意に頼る時代ではなくなってきたように思います。彼らのやる気を削ぐことなく働き方改革を成し遂げることが出来るのかどうか、難しい局面です。

平成 29 年 7 月 12 日

好文木「ちょっぴり寂しい出来事」

阪神千船駅から千船大橋を渡り神崎川東岸の歩道を通って学校に来ていますが、その歩道の護岸壁の下に植え込みスペースがあります。以前は低木が植えられていましたが、手入れが行き届かずあまり美しい状況ではなく、ペットボトルや空き缶が捨てられていました。2 年ほど前ででしょうか、一人の男性がその植え込みに花を植え始めました。毎日せっせと様々な花を植え水をやり見違えるほどきれいな花壇になりました。きれいになると、ごみも捨て難いのか、ペットボトルや空き缶のポイ捨てもほとんどなくなりました。殺風景な歩道が一変し、心を和ませてくれる道になっていました。私は学校への行き帰りに会々と、その男性と挨拶を交わすようになりました。ときには珍しい花の名前も教えてもらいました。色とりどりのドロップが生っているような木が唐辛子だというのも初めて知りました。



ところが、昨日気が付くと、一部を残しほとんどの花が撤去され土に戻されていました。そして、フェンスに「この樹木は、道路上に放置されており、道路法第 43 条 2 項に違反し、市民の皆さんの迷惑となっています。

所有者は平成 29 年 7 月 25 日までに除去してください。期限を過ぎてもなおこのまま放置されているときは、大阪市において道路法第 42 条 1 項に基づき除却します」との市長と警察署長連名の告示が貼られています。

この場所は大阪市の所有で、男性は無許可で花壇を造っていたようです。法律に違反する行為は許されません。ただこの告示文中の「この樹木は道路上に放置されており、市民の皆さんの迷惑となっています」という件については、あまりに紋切り型に過ぎるのではないかと思います。少なくとも彼の造っていた花壇の草花は私の目を楽しませ心を和ませてくれていました。当事者間にどのような話し合いがあったのかは承知していませんので、無責任な発言は差し控えねばならないと思いますが、この結末、ちょっぴり寂しいなと感じます。

平成 29 年 7 月 13 日

好文木「期末考査最終日」

今日で 4 日間の期末考査が終わります。考査期間中、生徒は通常より早めに登校し、教室やレストランで勉強するのが恒例となっています。

私はいつも 7 時半ごろに登校するのですが、今日は千船大橋を渡ったところで、後ろから 3 年生の生徒が追い付いてきました。いつもは 8 時 20 分ごろ登校する標準進学コースの生徒ですが、考査期間中は早く来ているのを見ておりましたので「試験中は早く来てるんやね」と声をかけると、「朝 4 時半まで勉強していたので 1 時間しか寝てません。暑いですね。校長先生はいつもこの時間に來られてるんですか。早いですね」と。「今日で終わりだから頑張っ。ところで進路は決まっているの？」と訊ねますと、「具体的な大学はまだ決めていませんが、短大に行きたいんです。やりたいことがいっぱいあって」と前向きな答えが返ってきました。

既にレストランにはバスケットボール部や弓道部の生徒たちが集まって勉強していました。日ごろは 8 時 15 分から 20 分ごろに登校する 3 年生の保育進学コースの生徒たちも、教室で勉強していました。8 時から 8 時半まで校門に立っていますが、考査期間中は半分ぐらいの生徒は 8 時前に登校しているのではないかと思います。

今日は梅雨が明けたようなお天気で校庭には蝉しぐれ、もうすっかり夏です。



平成 29 年 7 月 15 日

好文木「変わる TP0」

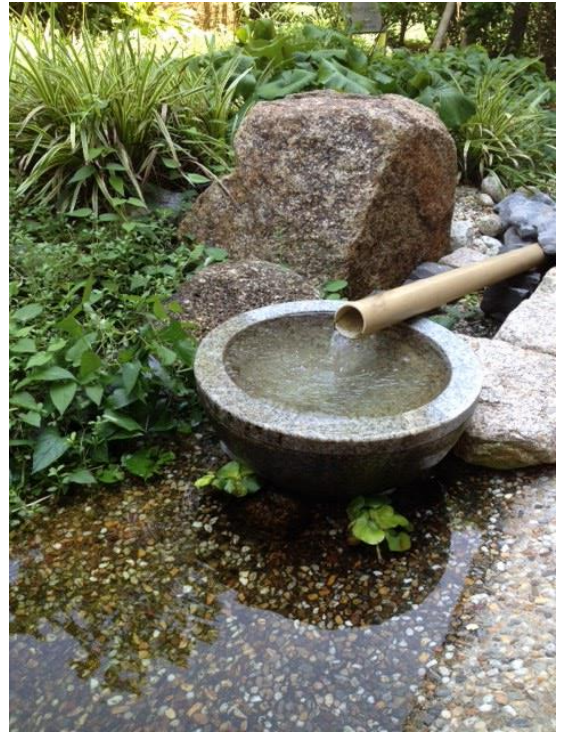
この時期になると、クールビズが話題となります。今朝のダイヤモンド・オンラインに伊藤忠商事が服装規定を大胆に改正し、毎週金曜日を脱スーツ・デーとして石田純一風も OK となったとの記事が掲載されていました。いわゆるくるぶしまで出して素足に靴を履くスタイルも認められるそうです。ポロシャツ、カーゴパンツ、スニーカー、ジーンズ（破れ加工やオーバーオールは不可）も OK。伊藤忠は私の古巣であり、財閥系に比べると自由闊達な社風の会社でしたが、30 年前にポロシャツ、チノパン、素足にスニーカーで出社したら、きっと、大阪出身の上司から「おまはん、なに考えてんねん。どこ遊びに行くねん」と怒鳴られたことでしょう。

伊藤忠には繊維商社から総合商社へと発展した歴史があり、繊維部門には強みがあります。現社長の岡藤氏はいち早く早朝出勤推奨と残業の制限などいわゆる働き方改革には積極的に取り組んでおられます。ご自身が繊維部門出身ですから、特にファッションについては一家言おありで今回の服装規定改革も率先されたのだらうと思

います。この改革の趣旨は、社内の雰囲気を変え会議などでの新しい発想の出現を期待し、またアパレル市場の消費活性化にも一役買うことを期待してとのこと。

しかし、服装をカジュアルにしたから新しい発想が出るというよりは、奇抜な発想をする人は常識に拘らず我が道をゆく服装をしているというのが本当のところではないのかと思います。伊藤忠によると、行き過ぎるとチャラくなるので、「TPO をわきまえた仕事着で」ということらしいですが、ここまで来ると、わきまえるべき TPO の基準は大きく変わってしまっており、是非を問うには非常に高度なファッションセンスが必要だと思います。

環境省では今年もアロハシャツも OK のスーパー・クールビズを実施されているのでしょうか。学校にこのクールビズの波が押し寄せないことを願います。何分最近では、教育改革にも欧米化が進んでいますので、創造性や感性を磨くために学校にもクールビズ導入をなどと言われては生徒指導の現場は大混乱になるでしょうから。何事も、基礎基本が備わってこそその応用なのですから。



平成 29 年 7 月 19 日

好文木「ノンアルコールビール」

最近インターネット上で、職場の休憩時間中にノンアルコールビールを飲んでいて女性が、上司からとがめられ出勤停止して反省文を書くことを命じられたことの是非を問う議論が白熱していました。当初はアルコールが 1%未満のものをノンアルコールビールと称していましたが、今は完全にゼロ（アルコール度 0.00%）の製品が多くなりました。以下で述べるのは、アルコール度 0.00%完全にゼロのノンアルコールビールのことです。これは法律的には何時、どこで飲んでも問題はありません。とはいえ、現段階では仕事中に飲むのは NG というのが支配的な空気のようにです。



そこで、この問題を 1 年 1 組の「やさしい経済学」の中で取り上げ、生徒たちの意見を聴いてみましたが、ほぼ大半が、仕事中にビールを飲む時の雰囲気を味わう必要はないからという理由で、職場でノンアルコールビールを飲むのは良くないというものでした。ただ、仕事中はダメだけど休み時間ならいいのではという意見もありました。

ノンアルコールビールは、飲酒運転の罰則が強化された 2002 年の道路交通法改正から需要が伸びてきました。また家庭において、食事の後片付けなどの家事や子供の世話をしなければならない時、ビールを控えてノンアルコールビールを飲むようにもなりました。ノンアルコールビールを飲む人はほとんどが日頃ビールを嗜む人です。

私自身、車の運転が必要でアルコールが飲めない時、みんながお酒を飲む雰囲気を壊さず自身もビールの味も楽しめることからウーロン茶ではなくノンアルコールビール（アルコール度 0.00%）を注文することがありますが、仕事中心や休憩時間にノンアルコールビールを飲むことには抵抗があります。アフターファイブとのけじめがつかない様な気がするからです。

ところが、先日、ニュースでビールの売れ行き不振に喘ぐビールメーカー各社がノンアルコールビールの販売に力を入れるため、職場に自販機を設置する動きが進んでいると報じていました。サントリーは既に社内食堂にノンアルコールビールを置いており、いつでも飲めるようにしているそうです。また、顧客への自販機設置にも積極的とのこと。「会議の雰囲気が柔らかくなり活発な議論が望める」との声もあるようで、ノンアルコールビール OK の企業が増えそうです。

但し、未成年者に対するノンアルコールビールの販売については、アルコール分ゼロなら飲んでもいいというものの、ビールの味を知らないはずの未成年者に敢えてノンアルコールビールを飲む機会を与えることで本物のビールへの興味が喚起される可能性があり飲酒を誘発するとして小売店側が販売を自主規制しています。

クールビズも当初は、暑さ対策、省エネ対策だったのですが、今では職場の雰囲気が明るくなり自由な発想が生まれるというような理由から必要以上のカジュアル化が進んでいるように感じます。経済成長が低迷し消費が伸びない中、企業の販売促進戦略が透けて見え、複雑な気持ちが致します。

平成 29 年 7 月 21 日

好文本「終業式を終えて」

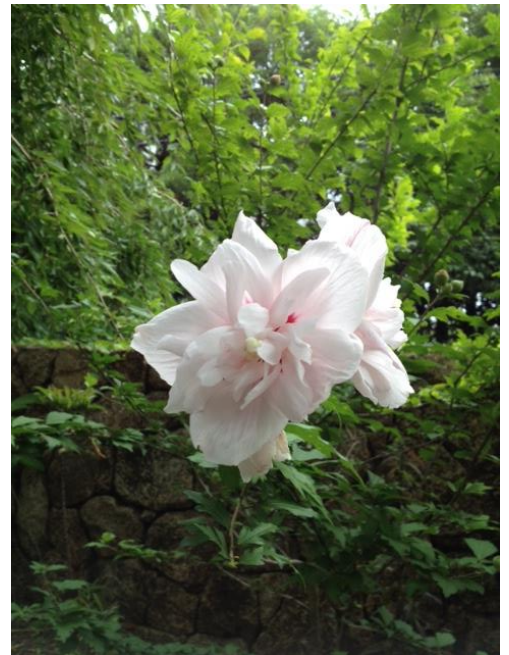
昨日は終業式でした。先ず、満員電車や自転車で汗だくになりながらも登校し自主的に椅子を持って体育館に集合し終業式に望んでいる生徒たちを労うとともにその当たり前の積み重ねが将来を拓くことを話しました。そして、1 学期に校長ポストに投函された手紙につき、「匿名の手紙もけっして「怪文書」扱いせず、事実を確認して丁寧な説明を心掛け「説明責任」を果たしてきましたが、それでも納得のゆかないことがあれば、いつでも話を聴くし説明もするので校長室に来て下さい」と全校生徒に伝えました。

レストランのメニューや自販機の商品についての要望に関しては、生徒会でアンケートをとり生徒の意見を運営業者に伝える方法をとるよう生徒会部長に依頼したことを話しました。「全校生徒に宣言したのだからちゃんとやってよね」と生徒会部長の先生に念を押したら、「いやはや優先順位を上げざるを得ませんね」と苦笑い。

校長ポストに入っていた手紙の取り扱いについては、個人的な悩みを書いてきた生徒には校長室で十分時間をとって話を聴きました。先生の対応や言動についての不満についてはいつどこでどういうことがあったのかをノートを取りながら聴き、当該教員に事実確認を行い、改めるべきところは改めるようにアドバイスを致しました。芝生の通行についての疑問と不満については、グラウンドを天然芝生化した理由ならびに芝生を楽しむための使い方について当該生徒にきちんと説明を行い納得を得るとともに、改めて文章を校長名で作成し、担任に各クラスで読んでもらうとともに教室内に掲示をしてもらい全校生徒に徹底いたしました。

校長ポストや校長室がオープンであることにに関して、生徒が何でもかんでも校長に文句を言えば自分の思いが通るようになっては生徒が図に乗り教師の立場がなくなるのではないかと心配される向きもあるかと思います。しかし、生徒の意見に一理あるとすれば、それは取り上げねばなりません。そして教師であればこそ、「過ちては則ち改むるに憚ること勿れ」の姿勢を示すことこそ、教育であり生徒の信頼を得ることに繋がると思います。

終業式の後には、3 年生の激励会でした。1 年生と 2 年生の代表による激励の挨拶の後、3 年生の大学を目指す看護医療系進学コースと既に漫画家デビューが決まっているマンガアニメーションコースの生徒が決意表明を



しました。最後は、インターハイ、全国大会に出場する弓道部、ソフトテニス部、少林寺拳法部、ワープロ部の生徒たちの壮行会が行われました。

終業式が終わり明日まで三者懇談が行われています。玄関には、来年4月着工予定の3層のアリーナと一体となる美術棟のパースが置かれ、生徒と保護者がその前で立ち止まり談笑する姿が散見されます。懇談を終えた生徒と保護者は悲喜こもごも、猛暑の夏休み、自分サイズの未来を拓く好文生に幸多かれと祈らずにはおられません。

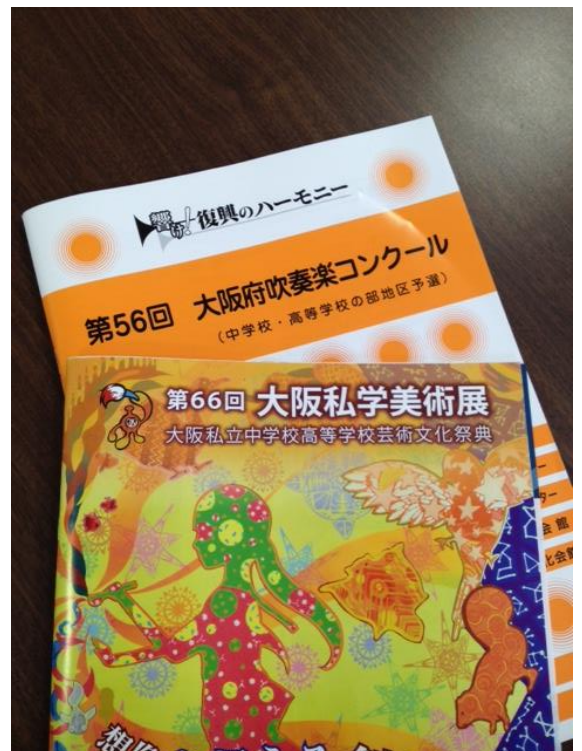
平成 29 年 7 月 26 日

好文本「あっぱれ！」

7月24日、第56回大阪府吹奏楽コンクールの北地区大会が大東市立総合文化センターで行われ、本校吹奏楽部が高等学校の部B組出場し初めて金賞を頂きました。地区大会から府、関西、全国へと進むA組へ一步進むきっかけになったと思います。10年前に壊れた楽器をどうにか直したり、足りないものは他校から借りたりしながら、数人からスタートした吹奏楽部でしたが、地域のイベントにも参加が増え好文学園の応援団としての活躍が定着しました。42名の演奏を感無量の思いで聴いてまいりました。10年計画での楽器購入も一段落し、これからクラブとして益々磨きがかかるのではないかと期待しております。

そして昨日7月25日、第66回大阪私学美術展を觀に大阪私立美術館に行っていました。ここ数年、本校のデザイン美術イラストコースからの出品作品は質量ともに充実してきており、今年も頑張っているなどと思って戻ってまいりましたところ、今朝、コース長から嬉しい報告がありました。昨日の審査の結果、約1,000点の作品の中から優秀賞に14点、奨励賞に21点が選ばれ、その中から、本美術展第1位となる大阪府知事賞を3年生の岡部藍加さんが、第4位の大阪市立美術館館長賞を2年生の森本来実さんが受賞するとともに、次年度、長野県で開催予定の全国高等学校総合文化祭に2年生の森本来実さんと増山花凜さんの2名が参加出品枠を頂きました。大阪からは4名の枠なので半分を本校生徒が占めたということになります。また、上位3校にのみ与えられる学校団体優勝賞にも堂々1位に輝きました。来年度のアリーナ一体型美術棟建設着工に見事な花を添えてくれました。

クラブ活動の成果は賞や順位で表されます。しかし、本当に大事なはその過程で何を学んだかだと思います。好文学園のクラブは勝つことが目的ではないと私は言い続けています。正しく言えば、他人に勝つことが目的ではなく自分に勝つことを目的とすべきだということです。上記の生徒たちは自分の何かに打ち勝ってきた結果として賞を獲得したのだと思います。そして、それは指導者であり伴走者である顧問の教員の惜しみない努力の賜物であると思います。



平成 29 年 7 月 27 日

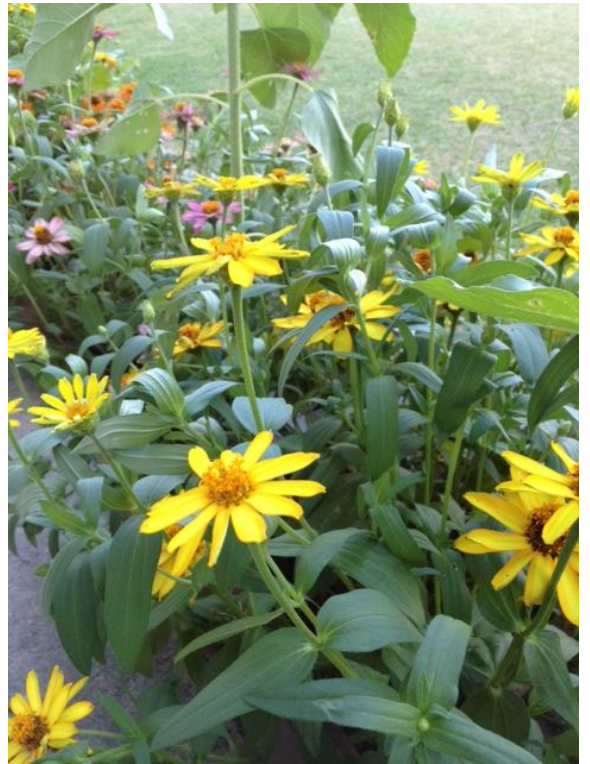
好文木「夏休みの風景」

20 日に終業式を終えて夏休みに入っていますが、特別進学コースは南港の大阪アカデミアで 3 泊 4 日の勉強合宿、看護医療系進学コースは校内で特別授業をそれぞれ実施しています。また、3 年生は進路の取り組みで登校している生徒が結構います。

今朝、いつもより少し早く 7 時に登校しました。さすがに通常授業がないので職員室にはまだ教員は来ておりません。校長室に鞆を置き、レストラン前の池の鯉の様子を見に行き戻る途中、階段を上がっていく足音が聞こえました。こんな早くから勉強をしに来ているのかなと思い、階段を上がると、廊下を通り 4 号館に渡って行く生徒の姿を認めました。4 号館 3 階の進路指導室で勉強するのかなと思いついて行くと案の定進路指導室に入りました。「おはよう、早いね。チュートリアル勉強？」と訊ねると、「ハイ、勉強です」と、3 年生の標準進学コースの生徒が答えました。

彼女曰く、中学校ではあまり勉強をしなかったもので、高 2 からチュートリアルに入り関関同立を目指して勉強を始めたそうです。「どう、行けそうかな」と訊くと、「模試の成績見て頂けますか？」と出してきました。「現時点でのこの判定なら可能性大いにありだね」というと、「チュートリアルから同志社はまだ合格者が出ていませんよね。その第一号になりたいんです」と笑顔で答えてくれました。

10 年前は、夏休みに入ると一部のクラブ生しか学校に出てきていませんでしたが、最近は部活だけでなく勉強や進路、秋の文化祭の準備などで結構多くの生徒がやってくるようになりました。校庭では阪神園芸さんが明後日の第 9 回小学生キックベースボール大会のために白線引きを行ってくれています。明日明後日はマンガアニメーションコースの夏の体験会も開催されます。それぞれの夏休みが進行しています。私もこれから合宿中の特別進学コース 3 年生の激励会出席のため差し入れを買って大阪アカデミアに出かけます。おっと、今、3 年前に卒業した生徒が二人校長室訪ねてきました。少し話をしてから出かけることにします。



平成 29 年 7 月 29 日

好文木「賑やかな夏休み」

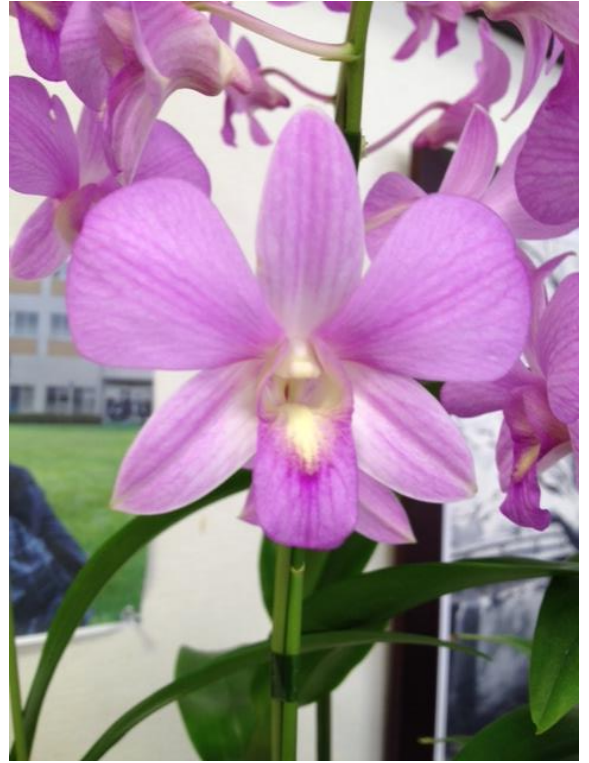
今日は第 9 回好文 CUP キックベースボール大会です。8 時半の開会式を前にもう 7 時頃から続々と小学生がやってきました。天然芝のグラウンドは、15 チーム約 200 名の小学生と監督、審判そして保護者の賑やかな声援で満ちています。生徒会の担当教員は 7 時に集合し、生徒たちも体操服に着替えて小学生の出迎えからゲーム進行までサポートしてくれています。ここ数年、生徒会は様々な行事にリーダーシップを発揮し活躍が実に顕著で学校の大きなエネルギー源になっており頼もしい限りです。

校舎内では、中学生対象のマンガアニメーションコース体験会 2 日目が実施されています。約 40 名の中学生とほぼ同数の保護者が来校されています。合間を縫って個別相談も受けており、顔を出すと、ちょうど私の母校の生徒の保護者様がお越しになっておりましたので、少しお話をさせて頂きました。

在校生もクラブに特別授業に進路の取り組みにと多数登校しており、今日は本校に小学生、中学生、高校生が

同居する状況となっています。昨日まで3泊4日の合宿を行っていた特進コース生は再び校内での特別授業に戻ってきました。3年生の一人は弓道部員で明日からインターハイに出場するので、今日は弓道場で調整に入っています。

昨日、ある中学校の先生が近くに来たとのことでお立ち寄りくださいました。いつも私の好文木を読んでくださっているとのことで大変有難く存じます。いっぱい付箋を貼った好文木をまとめた冊子「努力に勝る天才なし」を鞆からお出しになり見せて下さいました。特別なことはしていませんし言っていないので、お読み頂いてどれだけ参考になるのか甚だ心もとないところですが、それにもかかわらず愛読して下さっており感謝するとともに恐縮しております。私は教師経験がなく、いきなり校長になったので謂わば素人です。日夜現場の第一線で活躍されているプロの中学校の先生から少しでも共感していただけたところがあるとすれば、今後の自信にも励みにもなります。「この道より我を活かす道なし、この道を歩む」の感をさらに益々強く致すところです。



平成 29 年 8 月 17 日

好文木「21 世紀のルネッサンス」

夏休み、『井深大～人間の幸福を求めた創造と挑戦～』（一條和生著 PHP 研究所）を読みました。井深氏は盛田昭夫氏とともに「自由闊達にして愉快なる理想工場の建設」を設立趣旨とし、戦後間もない 1946 年、東京通信工業を創業しました。この会社が後に世界のソニーとなります。井深氏は優れた技術者であり、日本初のテープレコーダー、トランジスターラジオ、トリニトロン・カラーテレビそしてウォークマンを世に送りしました。この本は井深氏の評伝であり、井深氏の正に深く大きな人間性に触れることができました。

「メカナイズされたり、ハイテク化すればするほど、人間と人間の関係が非常に重要になり、人を受け入れ受け入れられ、人と本当に上手くやっていける人間が必要になってくるんですね。21 世紀になったら人間とか愛情とかいうものがますます重要なファクターになってくると思うので、自分に磨きをかけ、人との関係を大切にしよう心がけていく必要があろうと思いますね」これは井深氏がソニー創立 43 周年の 1989 年 5 月の社内報インタビューに答えての一節です。

また、翌 1990 年同時期の社内報では次のように述べています。「物理も科学も全てそういうものは道具と考えると、必要なときに勉強しても遅くないんだけど、哲学とか信念とかいったものはなかなかおいそれとは育たない。だから、そういう勉強をし、興味を持つような人を集めていかなければならないのではないかなと思うんですよ」

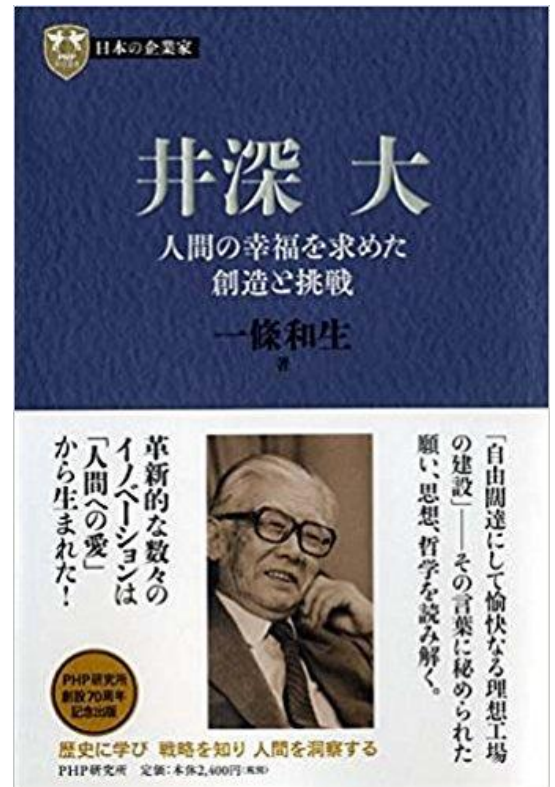
1989 年～1990 年といえば、バブル絶頂期でした。この後、バブルは弾け 20 年に亘る長期デフレの時代に突入しました。世界もアメリカ一極集中から、多極化の時代を迎え、政治も経済もますます不確実性を高めています。一方、IT の進歩は目覚ましく、AI（人工知能）は単純作業のみならず、熟練を要する仕事も取って代わろうとしており、人を活かす仕事とは何かが問われています。SNS を通してのトラブルも頻発し、ギスギスした人間関係が目立ちます。相手の立場に立ちじっくり立ち止まって考えてから発言するという姿勢が益々求められている現在、30 年前の井深氏の言葉は心に響きます。

グローバル人材育成を掲げ教育改革が進められています。暗記と詰め込み型学習だけではなく論理的思考、問題解決型学習が必要なのは言うまでもありません。しかし、そのなかで、国公立大学における人文科学系学部の廃止や再整備が打ち出され、文系軽視との批判が出ました。明治以来、国家に有為な役立つ人材を育てることが国立大学の使命であると考えられてきました。今回の教育改革においても、個人の幸福の追求というより経済成長のためにという側面が強く感じられます。

一方、西洋の大学はボローニャ、オックスブリッジ、パリ等々、12~13世紀までに設立され、国家に優位な人材を育てるというより、それら大学で学び研究した人々が国家の仕組みを変えてきたという歴史があります。日本は明治維新後に国家が大学を造ったわけですが、西洋は大学が国家を造ってきたといっても良いかもしれません。西洋にはギリシャ、ローマ以来のリベラルアーツ、教養教育が重要であるという共通認識がありますが、日本では哲学や文学は実学ではなくあまり役に立たないモノと考える傾向が強くなっているのではないのでしょうか。

評伝の中で、戦後すぐの東久邇宮内閣で文部大臣を務めた前田多門氏が1945年9月9日全国放送した「青年学徒に告ぐ」の一節も紹介されています。曰く「日本の行く道はただ一つ。武力を持たぬ代わりに、文化で行く。教養で行く。ほんとうの道義日本として世界の進運に寄与する。(中略)自然科学も大切であるが、同時に、世界現在の悩みとして、人文科学の進歩が、自然科学の歩みに遅れていて、跛行状態を呈している点に於いても、学徒の向学心を喚起したい。君子は器ならずということがあるが、明治以来の教育の弊風は、その反対に、人間を、ただ物の役に立つ器のみに教育して、却って、明治の初年までは存していた精神教育の根源を没却したのであり、この弊害を是正せねばならない」この文章からは無謀な戦争に突入した反省と新日本建設への決意が見て取れますが、現在においても警鐘として受け取ることができる内容だと思います。

明治以来、我が国は西洋先進国に追い付け追い越せで工業立国としての道を歩んできました。自然科学分野に力点が置かれたのは当然と言えます。しかし、人文科学と自然科学は車の両輪であり、そのバランスが崩れると社会に綻びが生じます。現在の日本を見渡すと、長期にわたるデフレとゼロ成長そして少子高齢化に直面し、再び経済成長をとの思いから、「役に立つ人材」、「役に立つ学問」ということに傾斜し過ぎではないかと危惧いたします。百歩譲って「役に立つ」ことを是認したとしても、変化が激しい時代、「役に立つ」と思われたものはすぐに役に立たなくなります。井深氏の人生を辿るとき、「大事なことは、技術そのものではなく、技術を支える哲学だ」という思いを強く致しました。AIが全盛となるであろう21世紀、再びルネッサンスの機運が高まるのではないかと思います。



平成 29 年 8 月 24 日

好文木「教員の生産性向上に思う」

8 月 22 日の日経新聞に「教員の生産性向上支援」と題する記事が掲載されていました。このタイトルを眼にしたとき、言わんとすることが直ぐにわかったものの、違和感を覚えました。

2018 年度から経済産業省は教育現場の生産性を高めるための事業を始めます。インターネット経由の外部講師による授業の導入、部活動の指導を外部に委託する取り組み、通知表や連絡帳のパーパーレス化等が例として上げられており、非効率な教員の作業を改善するアイデアを備えた企業を学校に紹介する方針であると報じています。安倍首相が新たに掲げたスローガン「人づくり革命」に絡めて事業計画を進める予定です。

教員の長時間労働やクラブ活動など過重労働を見直す必要は大いにあると思います。また、仕事のやり方で非効率だと感じることも多々あります。教員は長時間になることを前提に仕事をしている節があります。事の軽重の区別をつけないで仕事をしてしまう則ち優先順位が付けられない、自分の担当業務しか関心がなく学校全体のことが見えないという教員がいるのも事実だと思われます。忙しい時ほど優先順位を考えて仕事をして行けば逆に成果が上がるものですが、優先順位を付けられないでだらだらやるためなかなか成果が出ません。また、組織立って行動することが不得手で、自分のクラス、自分のクラブ、自分の分掌にこだわる傾向も歪めません。こういう点に関しては改善をしなければなりません。

しかし、超が付くぐらいの進学校で、学校が手取り足取り面倒をみなくても自主的に生徒が塾や予備校にも通うような勉強意欲の高い生徒の集まる学校は別として、多くの学校では授業後の補習、生徒指導、クラブ活動など教員の仕事はどうしても長時間にならざるを得ません。悩んでいる、困っている生徒を前に、「ちょっと他の用事があって忙しいから後で」とか「もう遅いから続きはまた明日」とは言えません。特に本校では「それは本当に生徒のためになるか」を全教職員の行動基準と定めており、生徒対応を最優先しています。生徒とのコミュニケーションをとるとするのはなかなか容易なことではなく、時間と手間がかかります。そして全て個別対応、正解が一つというわけにはまいりません。

何らかの成果を出さなければならないことは他の仕事と変わりはありませんが、教育を企業活動と同列に論じることは間違いだと思います。生産性とは、より少ない労力や投入物によりより多くの価値を生み出そうという考え方であり、経済活動には適していますが、人を育てるという長期スパンで多様な価値を見いだせ得ることに對しては、生産性ではなく「無駄の効用」こそ意味を持つと思います。

この記事はそこまで深く考えた上で書かれたものではなく、非効率な仕事の効率化で教員の長時間労働を改善するというだけの趣旨だと思いますが、「教員の生産性向上」という言葉が、一人歩きする危険性を感じます。

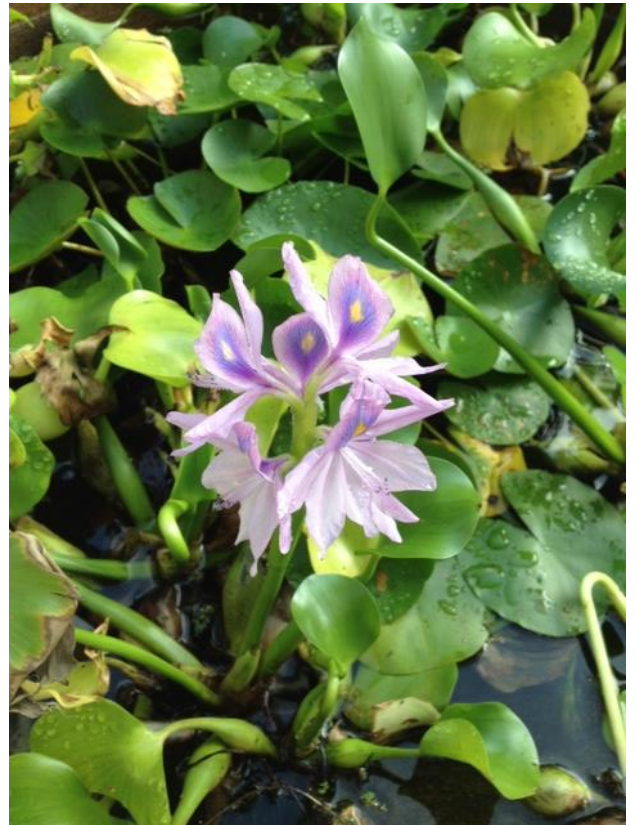


平成 29 年 9 月 6 日

好文学「930 人の生徒作文を読んで」

8 月 7 日、私立中学校高等学校連合会の夏季教員研修会があり、私が所属している高校第二校長部会が担当であったため参加し、異なる分野の四人の講師の方のお話を聴いてまいりました。それぞれ大変参考になったのですが、広報について話をされた講師の「一番大切なのは在校生の満足度です」という言葉が強く印象に残っており、全校生徒の満足度を確認したいと考えました。校長室は常にオープンにし、校長ポストも設置していますので、個別生徒の悩みや不満あるいは要望は聞くことが出来ていますが、絶対多数の動向は十分な把握が出来ていませんでした。今回作文を書いてもらうことで具体的に満足度を知ろうと考えました。

9 月 1 日始業式の日、「みなさんに作文を書いてもらおうと思います」と、話をしましたら、一斉に「ええ～」という声。「難しいものじゃないんです。みなさんが好文学園に入学した理由と現在の心境を原稿用紙一枚に率直に書いてほしいのです。そして改善すべきところは改善し、説明が不十分なところは説明を尽くしたいと思います。全部読みます。必ず読みます」と話しました。



そして約束通り全部読みました。なかには 4~5 行で終わっていた生徒も数人いましたが、ほとんどの生徒が原稿用紙一枚分をフルに使って思いを書いてくれていました。約 930 名の生徒の作文を読むのに延べ 10 時間ぐらいいはかかったと思います。否定的な感想や気になるものには付箋を付けて読み返しましたが、全部で 85 件ありました。私が直接話を聴いたほうが良いと思った二人の生徒には校長室に来てもらい話を聴き、私なりのアドバイスを致しました。また、尤もだと思ふ要望については関係分掌に早速検討を依頼しました。

「好文学園には心から感謝しています」、「今では公立高校を落ちてよかったと思います」、「後輩にも是非勧めたいです」というものから「特に不満はありません」というものまで幅はありますが、記載されている学校生活に対しての要望や不満を含めて総合的に判断して好文学園に入学したことに大変満足している、まあ満足していると回答している生徒はほぼ 90%です。満足している主な理由は、教員の親身の指導、楽しい友人関係、興味あるコースの専門授業そして天然芝などの明るく緑豊かな校内環境です。2 年生、3 年生になると、勉強やクラブ活動そして人間関係での困難やトラブルを経験したりし、そこから学び乗り越えてきた結果、「好文学園に入学して良かった」と思っている生徒が結構な数に上ることに少なからず驚くとともに大変うれしく思います。一方、校則や教員の指導に対する不満、そしてクラスや部活での人間関係を主な理由として、好文学園に入学したことを後悔し、公立や別の私学に行けばよかったと思っている生徒も残念ながら 10%ほどはいるという事実を軽んじてはなりません。教員の口が悪いとか、挨拶しても返してくれないとか書いている生徒もいます。生徒の態度が悪いから教員も怒鳴ったり言葉が悪くなったりするということもあるとは思いますが、そこは大人として冷静に指導すべきです。また、挨拶は先手必勝と言われる如く、常に先に挨拶や声掛けをしていれば見過ごしも少なくなるでしょう。反省すべき点は素直に反省しなければなりません。

時として教員の指導の荒っぽさや不公平さに問題があることを考慮しても、チャンスをつかえて「自分を変えよう、変わろう」としている生徒と現状に不満を持つだけで自分を変えようとししない生徒との差が、満足度に大きく影響していると思います。大きな不満を抱えている生徒をどのようにして少しでも前向きな姿勢に変えられる

かは学校の力、教員の力量にかかっていると思います。一人一人の教員が話の抽斗を増やし更に指導力を磨く必要があります。

ごく少数、学校というものの役割・意義を全く勘違いしていると思しき者もいます。「青春を謳歌したい」、「JKライフを楽しみたい」気持ちはわかりますが、本当の楽しさは苦しみを乗り越えた先にあるのであって所与のものではありません。満足や希望はそこにあるものではなくチャンスを掴んで自ら作り出すものです。学校が楽しい一辺倒で何の苦労も努力も必要なく過ごせるとしたら、そこに鍛錬や訓練はなく人としての成長は望めません。人として成長できるチャンスを与えないようでは学校としての機能が低いと言わざるを得ません。今回の作文を通してこのことを再確認した次第です。

平成 29 年 9 月 7 日

好文本「23 区内大学の定員抑制に思う」

先月末、大学のゼミの同級生、平野克己君から「日刊工業新聞から取材を受け、大学のゼミの堀江先生およびお二人のことに言及させていただいた記事が本日別添のとおり掲載されました。勝手にお話して申し訳ありませんでしたが、どうかご海容願います」という丁寧なメールが私ともう一人のゼミ生だった猪村浩君宛てに参りました。平野克己君は現在、日本貿易振興機構（ジェトロ）理事で、アフリカ経済研究の第一人者として活躍しており、「我が友 わが母校」というコラムへの寄稿を依頼されたものです。

猪村君もまた大学院に進み現在は国際石油資本メジャーの一社コノコ・フィリップス・ジャパンの社長として活躍しています。私達 3 人は早稲田大学政治経済学部で堀江忠雄先生のゼミで一緒になりました。私はマルクスの『資本論』への批判を通じて近代経済学を学ぶというテーマではなく堀江先生の人柄に惹かれてゼミに入りました。最初のゼミの顔合わせの時に、名前が観司（かんじ）だったため、「君がやれ」と堀江先生に言われ、ゼミの幹事をやることになってしまい、以後、平野君、猪村君と 3 人が中心となって 2 年間堀江ゼミを纏めてゆくことになりました。



大月書店の『資本論』を読みながらのゼミでは平野君は事前勉強をしっかりとやり積極的に意見を述べ堀江先生とのディスカッションも盛り上がっていましたが、私は窓辺で転寝をし、もっぱらゼミ後の飲み会で元気を発揮していたものです。平野君は記事のなかで、当時ご病気だった父君を慮って大学院進学を断念し就職しようかと悩んでいた時、我々が旅行を兼ねて小樽の実家に伺い、彼の大学院進学を父君に熱心にお願ひしたことに父君がいたく感激され進学が叶った旨の思い出を綴っていました。そんなこともあったなど当時を懐かしく思い出すとともに、彼が我々の友情に如何に感謝してくれていたか改めて知ることが出来ました。

さて、政府・文科省は東京 23 区内の大学の定員増をこれ以上認めない方針を打ち出しています。東京一極集中から地方創成へとの考えのようですが、生徒の大学選択の自由を抑制するのは如何なものかと思います。なぜ、東京の大学に学生が集中し、地方の大学が廃れつつあるのか、その原因をきちんと分析し、地方の大学自身が若者から選ばれる大学になることが大事ではないでしょうか。それに、最近の早慶の志願者・合格者の出身地域を見ると 70%以上が首都圏となっています。学費に加え東京での生活費を考えると地方から東京の大学への進学が厳しくなっているのが現状のようです。

私たちの時代は、東京の大学には地方出身者が結構多くいました。ちなみに猪村君は千葉県でしたが、平野君は北海道出身、私は兵庫県出身でした。予備校時代に共に学び明治大学に進学した友人は福岡出身でした。最初私は練馬区の石神井公園に下宿しており、恵比寿の彼のアパートに2~3人で集まりよく焼き肉パーティーをしました。今の学生ほど勉強はしませんでした。飲んだり食ったりを通して恋愛話に花を咲かせたこともありましたが、結構真面目な政治経済の議論もしました。異なる環境で育った若者が東京という大都会で共に学び互に影響を受け合う、私にとっては実に楽しいそして有意義な学生生活でありました。そこにはそれぞれの『青春の門』があったのではないのでしょうか。

平成 29 年 10 月 5 日

好文本「文化祭を終えて」

朝夕、めっきり涼しくなりました。布団から出るのが辛い季節が近づいてきました。

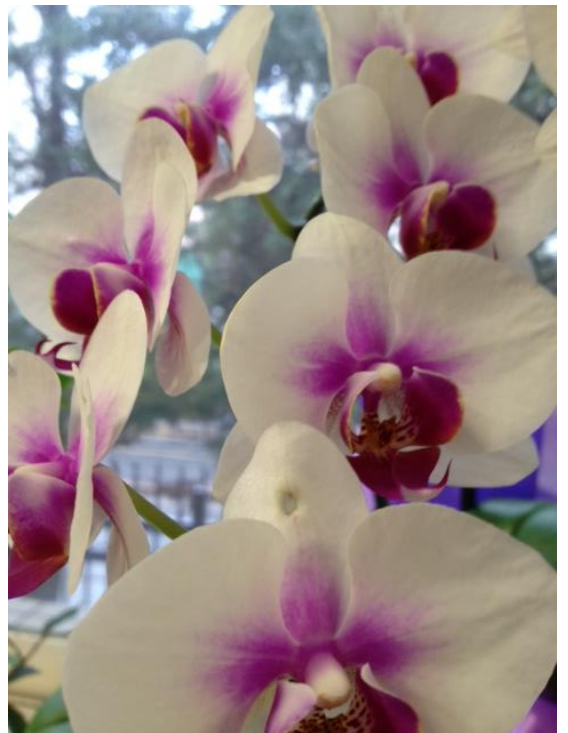
今朝、駅のホームでもうコートを着た男性を見つけました。寒がりの私、今年はコートを羽織る日が少し早まるかなと思います。

さて、先週末の土日、本校の文化祭『好文明華祭』が開催されました。土曜日の尼崎あましんアルカイックホールでの舞台公演には約 570 名、そして日曜日の校内での文化祭には約 1600 名、併せて約 2200 名の方々がお越しくださいました。その中には約 200 名の中学生とその保護者の方もいらっしゃいました。

そして何より今年目立ったのは約 160 名に上った卒業生でした。大勢の卒業生が母校の文化祭に戻ってきてくれることを大変喜ばしく思います。多くの卒業生が声をかけてくれました。「校長先生、ずっといて下さいね。私たちの子供が入学するまで」と嬉しいことを言ってくれる卒業生もありました。「わかった、わかった、頑張るよ」と答えたものの、考えれば 15 年から 20 年は先の話になりますから、私は 80 歳になってしまいます。約束は守れそうにありません。好文学園の良さに更に磨きをかけてくれる後継者を選んでおかねばならないと思っています。

明華祭にお越し頂いた方々からのアンケートを読むと今年も概ね好評でした。しかし、回数を重ねるごとに内容が安定してきていることは確かなのですが、踊り場状態にあり、壁を突き破る時かと思います。アルカイックホールでのクラスの舞台公演で感じるのは、ダンスや映像の出来栄はなかなか素晴らしいものなのですが、ストーリーにいま一つ深みがなく物足りなさを感じました。「おちがない」とアンケートに書いておられた保護者の方もおられましたが、同感です。校内での展示や映像についても同様のことが言えます。「もう一工夫欲しい」と思う作品がいくつかありました。

私たちは、テレビや映画を見て面白かったか面白くなかったかを批評しますが、いざ自分が作るとなると、相当考えて工夫しないと良いものは出来ません。観客の視点で面白いと思うかどうか常に検証しながら作って行かねば洗練されたものは出来ないと思います。全教員で今年の文化祭作品を振り返る機会を設け、演じ手や作り手も見つめるとともに感動できるさらに内容の濃い作品作りに一工夫したいと考えています。



平成 29 年 10 月 20 日

好文本『傾聴と共感』再び

今年 3 月、福井県池田町の中学 2 年生の 14 歳の男子生徒が自殺した原因が、調査の結果担任と副担任による強い叱責にあったと判明しました。本来、生徒を守るべき立場の教員が、その言動によって生徒を死に至らしめたということに深い憤りと悲しみを覚えます。

池田町教育委員会のホームページに掲載された学校事故等調査委員会の「調査報告書（要約）」（A4 用紙 16 枚）を読みました。そして、本校の生徒指導方針に掲げている『傾聴と共感』の大切さを改めて痛感しています。

本校においても時折、教員が『傾聴と共感』の姿勢を以て生徒の話をつくりと聴くことが出来きていない事象が見つかります。それが分かるのは、本校では校長室は常にオープンにし校長ポストも設置しており、生徒が直接相談に訪れたり手紙を入れたりするからです。いつもと違い浮かぬ顔の生徒に私から声をかけて、相談を持ちかけられることもあります。

私は生徒の話を聴いた後、必ず相手方の教員にも話を聴きます。往々にして教員は正論を述べれば相手も理解してくれると思っているのですが、生徒には全く伝わっていません。生徒の言い分を聴く前に滔々と正論を述べれば、一生懸命さは伝わったとしても、生徒からすれば、「自分の気持ちをわかってくれない」となるのは必定です。私は「しゃべりたい、じっと我慢の聴き上手」を生徒指導の標語にしています。まずは相手の話をじっくりと聴くことです。聞き流すのではなく、ノートに書き留めながら聴けば、頭の中で整理ができて、生徒の心情理解に近づけます。

調査委員会の報告書にも同様の場面が記載されています。保健室で担任が生徒に話しているのですが、生徒の声はほとんど聞こえてきません。話し合いの後、担任は生徒が納得したと感じたようですが、生徒にはもやもやが残った様子だったと、この二人の面談を傍で聞いていた養護教諭の感想が述べられています。一方通行だったわけです。

コミュニケーションは相手の理解できる言葉を使わなければ成り立ちません。相手の理解できる言葉を選ぶのは、相手の気持ちや置かれた状況を理解しようという真摯な姿勢があって初めてできることです。その姿勢があれば、発する言葉にも態度にも現れ、気持ちは生徒に伝わります。常に「なぜ自分の気持ちが伝わらないのだろう？」という自問自答を繰り返すことです。上手くゆかない原因を生徒や保護者の責任にしてはなりません。本校の行動基準の「それは本当に生徒のためになるか」に「本当に」を敢えて加えた理由は、「生徒のために頑張っている」と思い込んでいる教員に「生徒のため」とはどういうことかを熟慮してもらうためなのです。

今回の事件の教訓は余りにも重いものです。亡くなった生徒のご冥福を心からお祈りするとともに遺族の方々には心からお悔やみを申し上げます。



平成 29 年 10 月 24 日

好文本「先に生まれただけの僕」

先日、嵐の櫻井翔さん主演のドラマ「先に生まれただけの僕」の予告をご覧になった卒業生のお母様から「予告を見て校長先生を思い出しました。校長先生の顔が浮かんだ方が多いのではないのでしょうか？」とのメールを頂きました。

大手総合商社マンが不振に喘ぐ系列の私立高校の校長になるというストーリー。初回は見逃してしまいましたが、先週土曜日、第二話を観ました。櫻井さん演じる鳴海新校長は 35 歳の現役の商社マン。上司の専務に煙たがられ左遷人事で校長となり 3 年間で学校の立て直しを命じられます。学校に足を踏み入れた鳴海君は様々な違和感を覚えます。危機感の欠如、組織として仕事をするという意識のなさ、従来のやり方を変えることへの強い抵抗等々、なかなか教師たちとのコミュニケーションが上手くゆきません。

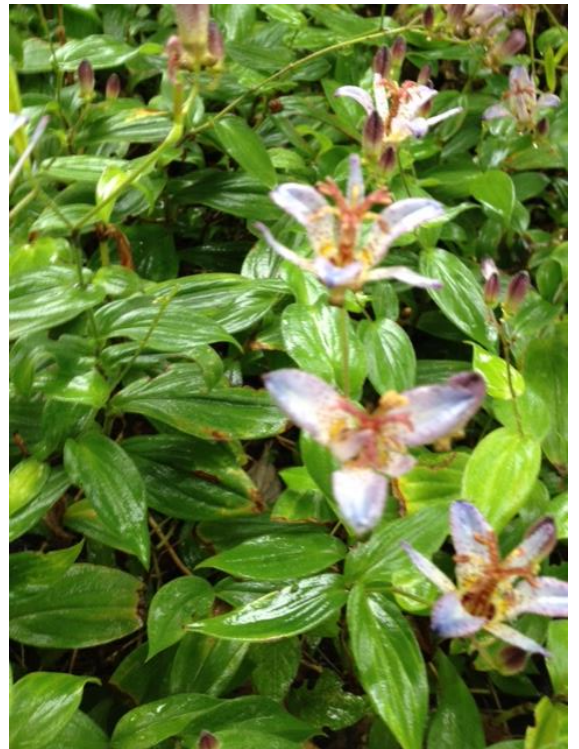
私も大学卒業後 7 年間、総合商社の伊藤忠商事に勤務しておりました。その後、家業の中小企業の経営に携わっていた時に縁あって本校の専務理事となり、翌年、私は 50 歳を機に思い切って全く畑違いの女子校の校長に就任しました。このドラマを観ながら、共感できるところが多く、10 年前をほろ苦く思い出しました。

「先に生まれただけの僕」という題名、私が生徒に話をする時にしばしば使う言葉でもあります。「校長だから偉いというわけではないんだよ。僕は君たちより少しばかり先に生まれて少しばかり多くの経験を積んだ人生の先輩としてアドバイスをしたい」と前置きして話しをすることがあるのです。

ビジネスマンである鳴海校長は、教師の懸念をよそに生徒たちには直球過ぎると思える現実的なアドバイスをします。それが意外にも生徒達の心に響き問題が解決の方向に向かいます。私も生徒から様々な相談を受けますが、生徒が自立できるように理想論ではなく現実論を話します。ただ、鳴海校長、自分の思いをしゃべることが先行して、まだまだ「傾聴と共感」が足りません。

鳴海校長が、自分の仕事は数学を教えることだと言って生徒の悩みに寄り添おうとしない教師に予備校への転職を勧めます。職員室でその教師が退職したことを報告し、「予備校の先生は講師と呼ばれます。学校の先生は教師と呼ばれます。教師は勉強だけを教えるのではなくもっと他に色々教えることがあるんじゃないでしょうか」と述べるシーンがありました。かつて私も同様の趣旨で「教員ではなく教師にならなければならない」と話したことがありました。

鳴海校長の部屋には、現在の世相を反映して「グローバル人材の育成」と書かれた額が飾られています。本校の職員室には「行動基準はいつも、それは本当に生徒のためになるか」というボードがかかっています。ドラマの後半で鳴海校長の部屋の額が掛け変われば面白いなと思います。



平成 29 年 11 月 21 日

好文本「理想と現実のギャップを知る」

ドラマ「先僕」（「先に生まれただけの僕」）は学校と実社会との隔たりを櫻井翔君扮する現役商社マンの鳴海校長先生の学校改革を通して描き出しています。前々回のお話では、生徒たちに社会の現実を語るシーンがありました。

改革の一環として新しい授業形態であるアクティブラーニング導入を決めます。今までと違う楽しく興味を持てる授業に生徒たちは大喜びで教室にも活気が出ます。しかし、3 年生にはアクティブラーニングをやっているのは受験に間に合わないと考え、今のままの授業形態で受験に向かわせることとします。しかし、その決定を聞いた 3 年生から「自分たちは学校改革の対象から外され見捨てられるのか」という声が上がります。代表者数人が校長室に詰問に訪れます。鳴海校長は 3 年生を集めて、やむを得ぬ処置であり 3 年生を外すことを詫びるとともに、社会の現実を語ります。

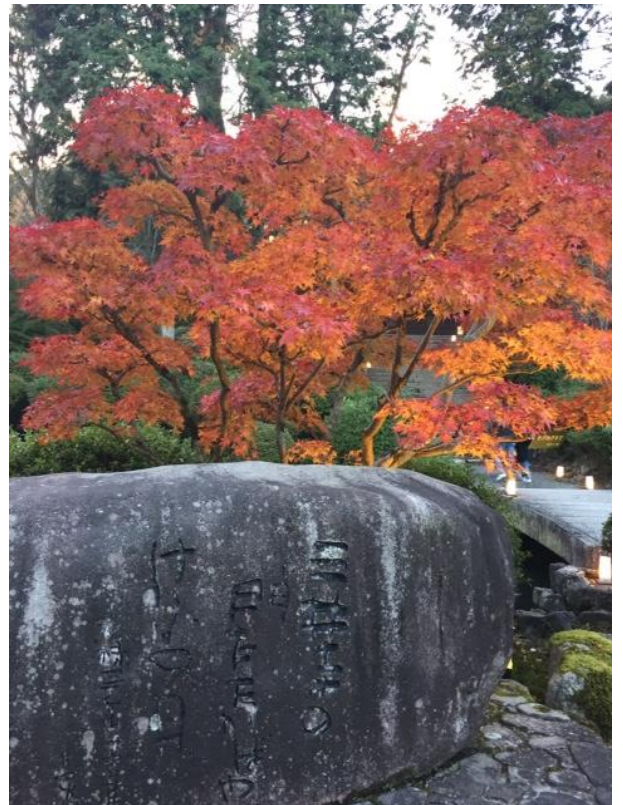
材料としてこの改革案が良いかどうかは議論の余地が残るところですが、現役の商社マンとして校長になった鳴海校長は、生徒達に人はどこかで線引き対象となるという実社会の現実をハッキリと告げます。私が思うにも、学校では平等や公平ということに主眼が置かれ、時に区別を差別と混同している場合があります。ところが、一旦社会に出ると、実績や実力でポジションが与えられ権限も付与されますが、努力したからと言って必ずしも報われるものではありません。非正規から正規への登用、昇進など選別を避けることは出来ません。評価する側と評価される側に厳然と分かれるのです。

私が商社に居た頃、会社の傍に散髪屋がありました。当時、面白い習慣があり、散髪は就業時間中でも行ってよいことになっており、課長代理などは昼間に出かけてすっきりした頭で帰ってきていました。散髪は紳士のたしなみとして認められていたようです。しかし、私たちはさすがに遠慮し、いつも残業の合間に行っていました。その理髪店の店長は社内事情にも詳しく話好きでした。店には役員も来ていたので、永年の勘で分かるようなのですが、前評判の良い人は社長になれないと言っていました。確かに、名家出身で実力もあり紳士だった役員や社外でも名を馳せるほど業績を上げた役員も社長レースからは外れました。店長は、私の勤務していた商社では、社長は紳士型とガラッパチ型が交互になるという珍説を唱えていました。トップでさえそうなのですから、多くの一般社員の人事でも皆が納得するものにはなり得ません。

入社当時、副社長から「君たちは真面目にやっていたら全員課長にまではなれる。その後は実力と運次第だ」というような話を聞きました。しかし、現実同期が全員課長にはなれませんでした。本社に残っている人も少なく、子会社や関連会社に出たものも多数います。経済状況の変化に応じ企業も変化しますから仕方ないと思います。

「オープンスクールで楽しそうよさそうな学校だと思って入ってきたのに全然違った、オープンスクールは詐欺です」という書き込みを他校の掲示板で見かけます。どこの学校もオープンスクールには自校の良いところをアピールし、在校生もきちんとやってくれる生徒を選ぶのが普通でしょう。ただ最近「毎日そんな文化祭みたいなことばかりやっているわけではないのになあ」と思えるような演出過多に感じるものもありますが。

私は中学生や保護者の方にあえて申し上げています。「オープンスクールではどこの学校も良いことしか言いませんし良いところしか見せません。でも、私は嘘は言いたくありません。本当の好文学園をご覧になりたい



なら、平日何時でもお越しください。現実を見て納得して本校を選んでください」と。

我々は理想の実現に近づこうと努力を惜しんではなりません。しかし、どこの世界にも理想と現実のギャップはあるものです。たまに、「この学校は偏差値が低いから」とそれを不満の材料にして自分の学校を貶めるようなことを言う生徒がいます。件の書き込みの他校生にもそういう側面が読み取れます。私は「それならどうしてもっと勉強して偏差値の高い学校に行かなかったんだい？」と問うてみたと思います。ところが一方で、「私は中学時代あまり勉強しなかったから、この学校に来ましたが、ここで勉強して難関大学に合格したいと思います」と言って毎朝毎夕個別指導で勉強している生徒もいます。自らのおかれた環境や状況を受け入れ、その中でどうより良く生きるかを考えること、考えさせることこそ本当のキャリア教育であり生きる力を養うことになるのではないかと、私は思うのです。

平成 29 年 11 月 28 日

好文本『日の名残り』から」

「品格の有無を決定するものは、みずからの職業的あり方を貫き、それに堪える能力だと言えるのではありますまいか」、これは今年のノーベル文学賞受賞作家、カズオ・イシグロの『日の名残り』の一節ですが、「品格」の説明として実践的な意味づけだと思います。

恥ずかしながら私は、カズオ・イシグロという作家を知りませんでした。今回の受賞を機に、先ず『浮世の画家』と『わたしを離さないで』を読んでみたのですが、核心に触れるまでの様々な場面ごとの描写が長く私には少々退屈に感じました。そして、三冊目に読んだ『日の名残り』は、一人の執事の少し偏屈なまでに紳士的な生き方を通して英国という国の自然、精神そして人を描くタッチに魅了されました。

ストーリーは 1956 年から始まります。主人公のスティーブンスはかつて政界の名士であったダーリントン卿の執事でしたが、現在はその屋敷を買い取ったアメリカ人ファラディ氏の執事として仕えることとなりました。ファラディ氏はアメリカにしばらく帰国する間、スティーブンスに数日の休暇を与えることを提案し、それを受けた彼はファラディ氏のフォードを借りて 6 日間の旅に出ます。

この旅の間、第二次世界大戦前後から戦後にかけて執事として見聞きした事柄を振り返ります。旅の終わりには、ダーリントン卿の対独外交における政治的失敗とそれを救うことが出来なかった自分への自責の念にかられ、そして自身の私生活もまた失敗であったかもしれないと感じます。この小説は、執事スティーブンスの回顧談を通して、栄光ある大英帝国の衰退を冷静にかつ温かく共感をこめて描き出しているのですが、そこにはかつての英国に対する称賛と愛着を読み取ることが出来ます。

執事の職業的あり方とは、主人に対する忠誠心と多くのメイドや下僕をコントロールして時間通りに完璧に仕事をこなすマネジメント力といえます。そしてそれを毎日寸分の違いもなく行い続ける継続力です。同じく執事であった父親が、主人のいない車中で主人に対して無礼な物言いをした客人に我慢できなくなり車を止めて静かにドアを開けた行動により客人に反省をもたらしただけを例に取り、「並みの執事は、ほんの少し挑発されただけで職業的あり方を投げ捨てて、個人的な在り方に逃げ込みます。----- 偉大な執事が偉大である所以は、み



ずからの職業的あり方に常住し、最後の最後までそこに踏みとどまれることでしょう」とスティーブンスは語ります。これはいかなる職業にも通じるプロフェッショナルの対応だと思います。

彼は、1923 年のダーリントン・ホールでの初の国際会議を執事として成功裏に終えたことを振り返り次のように述べます。「ある人の発達の決定的段階に何事かが起り、その人の能力の限界に挑み、それを拡張させます。その何事かを克服した人は、それ以降、新しい基準で自分を判断することになります」誰にでも事の大小はあれど、発達の決定的段階に何かが起こることはあります。それは大抵は難事であるのですが、それを乗り越えることで自信を付けることが出来、さらなる高みを目指して成長できるのです。

また、彼は女中頭のミス・ケントに恋愛小説を読んでいるのを見つかるのですが、それには明確な理由があると言って次のように説明します。「良い発音やさわやかな弁舌それ自体は、執事にとって魅力的な飾りであることは私も認めるにやぶさかではなく、私自身そうした能力を出来るだけ磨くことを心掛けてまいりました。その具体的な方法として最も手っ取り早いのは、やはり暇を見つけては、巧みに書かれた本を手に取り、この何ページかを読むということではありますまいか」と。そして重厚な学術書は人格を磨くには役立つが、お客様との通常の会話には、エレガントな会話を多く含む恋愛小説が向いていると述べるのです。堅苦しいスティーブンスの以外な一面を彼らしい理屈で説明しているところも笑みがこぼれますが、実践的な読書の効用を言い得て妙だと感じます。

アメリカ人の主人であるファラディ氏のジョークにジョークで応えようとするスティーブンスですが、上手くゆきません。旅から戻り、気持ちに一定の決着をつけた彼は、これから前向きにジョークの練習をしようと思います。英国のユーモアからアメリカのジョークへ、第二次大戦を経て英国の時代は終わりを告げアメリカの時代が始まります。スティーブンス自身の新たな時代への対応を感じさせる部分です。

彼は最後に振り返ります。「人生が思い通りにいかなかったからと言って、後ろばかり向き、自分を責めてみても、それは詮無いことです。----- 私どものような人間は、何か価値あるもののために微力を尽くそうと願い、それを試みるだけで十分であるような気がします。そのような試みに人生の多くを犠牲にする覚悟があり、その覚悟を実践したとすれば、結果はどうあれ、そのこと自体がみずからに誇りと満足を覚えてよい十分な理由となりましょう」私自身の想いともダブリ余韻を残す言葉です。

平成 29 年 12 月 1 日

好文木「高大接続教育改革に思う」

一連の高大接続の教育改革における大学入学者選抜改革において、受験に際し高校から大学に提出する調査書の見直しが行われます。①各教科・科目及び総合的な学習の時間の学習における特徴等②行動の特徴、特技等③部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等④取得資格・検定等⑤表彰・顕彰等の記録⑥その他の項目現行の欄を拡充し、現状よりさらに具体的な内容が記載されるようにするというものです。また、教員のみではなく生徒自身が諸活動を記録するポータルサイトも準備されます。データーの管理や整理がかなり大変になると思います。

文部科学省によれば、その趣旨は、大学入学者選抜において「学力の 3 要素」すなわち、①基礎的な知識・技能②思考力・判断力・表現力③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を多面的・総合的に評価するため、高等学校段階における多面的な評価への改善の取り組みを踏まえて、一人一人が積み上げてきた大学入学前の学習や多様な活動に関する評価の充実を図り、併せてこれらの評価がその後の大学教育に十分生かされるようにするためとしています。そして、一般選抜入試を含むすべての入試においてこの調査書と学力検査の合計で合否判定をするというものです。調査書の内容の評価方法と得点割合は各大学が決めます。調査書を参考にするのではなく評価対象とし得点化すということです。

AO 入試は学力考査の一発試験と異なり、本来は長期間の実践と実績が必要であり、学力試験で合格するより反って難しいともいえるのですが、一部の難関大学を除くと、実態は単なる学生の早期獲得の手段になっており、簡単な面接や小論文のみのところが多くなっています。今回考案されている調査書は、本来あるべき姿の AO 入試においての活用には適していると思います。また、AO 入試や推薦入試にも何らかの学力考査を課す方針には賛成です。しかし、「学力の 3 要素」の内、①と②は測定可能で点数化が出来ますが、③は調査書の内容からの点数化は難しいのではないのでしょうか。

部活動の実績や表彰等はその生徒の成果として評価することは妥当だと思いますが、それが必ずしも主体性や多様性、協働性を表すものとは言えない場合もあります。実際、生徒は様々です。部活だけは一生懸命やり成績も上げているが勉強には身が入らない生徒もいます。また勉強は熱心だが、部活はしたくないという生徒もいます。また、各教科における取組態度の評価も評価者の主観的にならざるを得ずそれらをどう客観的に評価して点数化するのでしょうか。百歩譲って、主体性の優劣を付けられるようにそれぞれの評価項目での観点を細かく決めたとして、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」のある人が大学に行くにふさわしくない人はふさわしくないと言い切れるものなのでしょうか。一般入試においては合否判断はシンプルかつ公平なものが良く、内容の改良は必要としても、調査書は参考に留め学力試験で判定すべきだと考えます。

日経新聞 11 月 23 日「未来学」欄において、関西学院大学の寺沢拓敬準教授（言語社会学）は小学校からの英語教育に関し、「世間のイメージほど英語習得の必要性は高くない」と述べています。就労者を対象にした調査で、「英語が必要」と感じる人は 4 割に上りますが、実際仕事で英語を「毎日使う」、「時々使う」は計 1 割前後との結果になっています。私もこれが本当の世間のイメージだと思います。英語 4 技能が無ければ生き残れない職業は少ないと思います。この記事ではシンガポール、スウェーデン、ドイツ、フランスなど 18 か国の英語力保持者の割合の調査結果から、エリート層の英語力は他国に劣るが、街中の案内表示を理解する程度の英語力は多くの人が持っているというのが日本の国際的な位置づけのようだと論じています。一般レベルでいえば各国とも大差ないということです。

優秀な大学生ももちろんいますが、全体として大学生の学力低下は疑いの余地はありません。規制緩和で大学や学部の新設が相次ぎ需給のバランスが崩れ、学力テストなしで入学する大学生が増えているのですから。高等教育の無償化論も出ていますが、本来なら大学に行くにふさわしくない低学力の生徒までが簡単に大学に入れるという現状は変えなければなりません。そうでなければ、高校生の学習意欲も向上しません。

高校の授業改善として、アクティブ・ラーニングが推奨されています。この授業形態が一定の成果を上げるためには、生徒にある程度の知識の定着があることが前提条件になります。クラスには理解度の違う生徒が混在しています。アクティブ・ラーニングが理解を深める生徒もいれば、今までの講義形式の方が良い生徒もいます。講義型の授業に一部取り入れることは刺激にはなると思いますが、毎回の授業をアクティブ・ラーニングで行うとすれば、単元は進まず授業時間の大幅な拡大が必要となります。全ての生徒にアクティブ・ラーニングが効果的だとはいえません。

私は大学入試における記述式問題の導入については賛成です。英語 4 技能評価への転換と高校でのアクティブ・ラーニングの導入については、その一般化には無理があると思います。「グローバル人材育成」が叫ばれていますが、全ての生徒にグローバル人材となることを求める必要はありませんし、求めてもなれるものではない



と思います。

文科省や審議会が出す教育改革案は常に正論であると思います。かつての「ゆとり教育」も、その趣旨は正論であったと思います。であるがゆえに、上手くゆかないのだと思うのです。実際の生徒や学校は生身の人間でありその集まりです。合理的には出来ていないからです。経済学における合理的経済人モデルが現実の経済現象を説明しきれないのと同様に、合理的ではないモノを一律に合理的基準に当てはめようとすれば齟齬をきたすのは当然ではないかと思うのです。

平成 29 年 12 月 10 日

私から中学生の皆さんへのメッセージ

櫻井翔君主演のドラマ「先に生まれただけの僕」の京明館高校、鳴海校長は 35 歳で現役の商社マンです。私は元商社マンで今から 11 年前、50 歳の時に校長になりました。年齢は違いますが、鳴海校長に似ているところがあります。それは、本音で話すところとお節介なところです。私は生徒に話をする時に、「僕の言うことが絶対正しいかどうかかわからないけど、君たちより少しばかり先に生まれて、少しばかり多くの経験をした人生の先輩としてアドバイスをしたい」ということがあります。元祖「先僕」としてこれから高校に進学する中学生の皆さんに私のメッセージを伝えたいと思います。

振り返ってみますと、私は本当に沢山の失敗をしてきたなと思います。中学受験での失敗、大学受験での失敗、仕事上での失敗と数え上げるときりがありません。人間関係での苦いトラブルも幾度かありました。そしてそこから随分学ばせてもらいました。お蔭で容易には失敗にめげない「挫折力」を身に付けることができたと思います。人間は失敗とともに歩み、失敗とともに成長するものだと思います。失敗を恐れないでください。



好文学園はまだ偏差値は高い高校ではありません。時々、それを卑下する生徒に出会います。また、勉強が出来ないことの理由に頭の悪さを上げますが、私は、それは違うと思います。小学校時代、私は算数が出来ませんでした。父親に「お前は頭が悪い」といわれていました。希望の中学を受験出来なかった私は、地元の公立中学に通いながら塾で必死に勉強して私立の進学校に合格しました。しかし、高校に入ってから勉強意欲が続かず 3 年間でボーと過ごしたので当然の報いとして大学受験に失敗し浪人する羽目に陥りました。勉強に関して、私は成功と失敗の両方を経験しました。

私自身、父親に言われたほど頭が悪いとは思いませんが、さりとて今まで自分のことを頭が良いと思ったことは一度もありません。並みの頭だと思っています。世の中には天才だと思えるぐらい頭の良い人もいます。しかし、それは極少数で、ほとんどの人は私も含めて大差ないのではないのでしょうか。勉強は正しい方法で適切な量と質をこなせばある程度出来るようになるのです。そして、将来どんな仕事に就こうとも、基礎的な学力は必要です。勉強する努力を惜しんで頭の悪さを理由に自分を納得させていては道は開かれません。偏差値 70 を超える高校に入っても勉強しなければ大学に合格は出来ないのです。一方、偏差値がまだ 50 に届かない好文学園でもしっかり勉強すれば塾や予備校に行かなくても国公立大学や難関私立大学に合格しているのです。

大手企業に就職するには、多少の例外はありますが、基本的には難関といわれる大学を出ないと難しいでしょ

う。彼らは学生を多く採用したい大学をターゲット校として設定し限られた大学からしか採用しないのです。今も昔も変わらぬこれが学歴社会の現実です。しかしながら、どうしても勉強は苦手だという人もいます。その人は学歴に左右されない別の舞台での活躍の場を考えればいいと思います。一流大学を出て一流企業に入るだけが幸せな人生を歩む方法とは限りません。好文学園は 8 つのコースを用意して、「自分サイズの未来を拓く」ことを可能にしています。

私は皆さんに「君たちの前には無限の可能性が広がっている」とはいえませんが、残念ながら人は能力や才能において平等ではありません。皆が皆グローバル人材になれるわけでもありませんし、また、なる必要もありません。しかし、過去にこだわり自分を卑下して過ごすのか、「やればできる」と信じて努力するのかで、未来が変わってくることは確かだと思います。過去に囚われることなく、目の前を通り過ぎるチャンスをしっかりと捕まえて、地道な努力を続ける先にこそ未来は開かれます。悔いのない人生を送るために必要なのは、自分のおかれた状況を分析することではなく積極的に前に踏み出す勇気なのです。

好文学園は、「それは本当に生徒のためになるか」を行動基準としています。ダメなものはダメという原理原則ある指導、傾聴と共感に基づくコミュニケーションの深化、そして情報の共有化と迅速な対応が好文学園の生徒指導方針の要です。この方針を補完するため、校長室は常にオープンにしていますし、校長ポストも設置しています。好文学園は生徒の勇気をしっかりとサポートしていきます。私は少しでも多くの人に私の経験を話し自分サイズの未来を拓くためのお節介をやきたいと思っています。

平成 30 年 1 月 9 日

好文本「アリストテレスの学びの 3 原則」

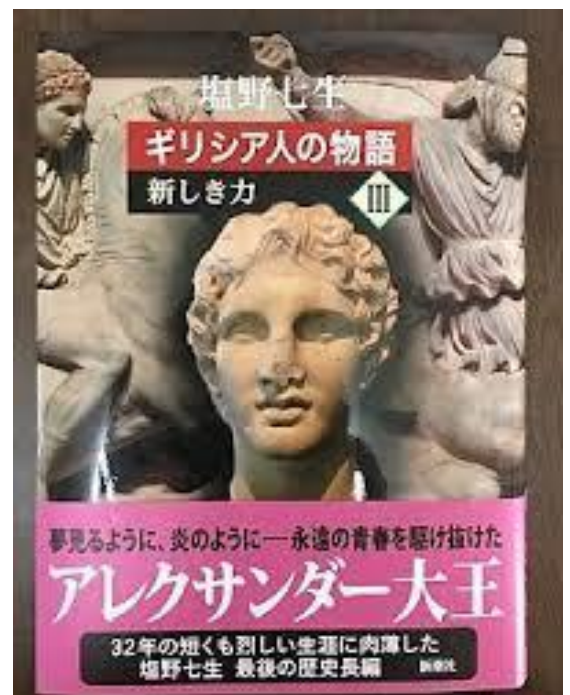
「ローマ人の物語」全 15 巻を始めその著作はほとんど読んできた塩野七生さんの最後の長編歴史小説「ギリシャ人の物語」第 3 巻を読み終えました。

アレキサンダー大王の師匠であった哲学者アリストテレスは、年少の弟子たちに次の三つのことを教えたそうです。①先人たちの考え・行動を学ぶ、即ち歴史に学ぶこと②日々もたらされる情報を偏見なく冷静に受け止める姿勢を確立すること③①と②に基づいて自分の頭で考えて自分の意志で冷静に判断したうえで実行に持っていく能力を身に付けること。これは今、教育改革の中で盛んに言われている「論理的思考力」や「問題解決力」に他なりません。今から約 2400 年前の古代ギリシャにおいて既に学びの基本姿勢として推奨されていたのです。

ギリシャ、ローマ時代のレリーフには、寝そべりながら議論をしている様子が描かれたものがあります。中学の論語は孔子と弟子とのやり取りが書かれています。幕末の松下村塾でも吉田松陰は弟子たちと議論を交わしました。これらはみなアクティブラーニングといえるでしょう。アクティブラーニングは何もアメリカの専売特許ではないのです。

人の能力を伸ばすあるいは成長を促す方法というのは古今東西を通じて不変ではないかと思います。異なるのは道具であり、それが現在では ICT 教育といわれる情報通信技術です。

教育学者の斉藤孝さんはその著書の中で、アクティブラーニング提唱者のシカゴの小学校での実践は短期間で取りやめとなったというエピソードを紹介されています。結局、基礎基本の知識が身についていないとアクティ



ブラーニングは効果を発揮しないということです。

ギリシャやローマの哲学者たちや孔子の弟子たち、松陰の弟子たちも書物を通じて基礎基本の知識はしっかりと身に付けていました。従って、従来型の教師による講義形式の授業や暗記、詰め込みが良くなく、アクティブラーニングが良いというものではなく、従来型の教育には基礎学力を定着させる効果があり、それが出来た上でのアクティブラーニングが大切だということになります。PISA の学力検査でも日本の方がアメリカより上の結果が出ています。

そもそもアクティブラーニングは大学で行われていたものです。欧米の大学では、少人数クラスでテーマが与えられ授業までに膨大な資料を読み込んでディスカッションします。資料を読み原典に当たり、多様な見解を理解し比較したうえで自分なりの考えを導き発表するのですから相当な勉強量が要求されます。学問に王道はないといわれる所以です。

最近発表された男子小学生の将来になりたい職業のトップに学者・博士が 15 年ぶりに返り咲いたことが少し話題になっています。近年多くの日本人がノーベル賞を受賞した結果だといわれていますが、ノーベル賞受賞者の多くはアメリカの大学での研究実績がありますが、中等教育までは日本の従来型の教育で育っています。

鳴り物入りの教育改革であります、アリストテレスの学びの 3 原則（私はそう呼びたいのですが）を当てはめて見えてくる景色はマスコミ等が大々的に報じているものとは少し違ってくるのではないのでしょうか。

今日は 3 学期の始業式でした。生徒にこのアリストテレスの学びの 3 原則につき話を致しました。そして、毎月 1 冊は読書をし、毎日のニュースに目を通す習慣を持つことを勧めました。それだけで飛躍的に世界観が広がるはずで

平成 30 年 1 月 15 日

好文本「1 点の差」

今季最強最長の寒波が居座り、朝の気温はマイナス、手袋をしていても手がかじかむそんな中、先週末 2 日間にわたるセンター試験が行われました。

平成 20 年に特進コース設置以来、私は毎年大阪天満宮にお参りし、「通り抜け鉛筆」（通称、合格鉛筆）を買って帰り、センター試験を受ける生徒たちに手渡しています。最近は特進以外のコースからも個別指導を受けてセンターに挑戦する生徒が出てきたので、特進コースの人数分より少し大目を買ってきています。大学全入時代を迎えたというものの、難関大学への道は険しく、1 点の差が合否を分ける非情な戦いに挑む生徒たちにエールを送らずにはおられません。

私の時代は、センター試験はおろかその前の共通一次試験もなく、国公立も私立も独自入試一本、一大学一学部一回だけの試験、まさに一発勝負の世界でした。私はこの一発勝負に 3 年連続で挑戦し、ようやく志望大学の合格を手にしたのであまり偉そうなことはいえません。当時、大規模な私大は一学部「1 点 500 人」といわれており、1 点足らずで涙をのむ受験生が 500 人といわれていました。

スポーツでは相手が自分を上回れば負けます。ここまでやったら絶対に勝つという保証はありません。しかし、受験は理解すべき範囲が決まっておりそれを完璧にやれば合格できます。そして満点以上の点はありません。やることが決まっている勝負といえます。

私の経験でも希望的観測で受験に臨んだ時は失敗し、自信を持って臨んだ時に成功しています。その差は各教科の各分野において取りこ



ばしなく理解が出来ているかどうかです。得意分野が出れば点数がとれるというのでは、得意分野だけが出題される確率は極めて小さいので、本番での失敗の確率が高くなります。私の二年目がそうでした。三年目、文学部の試験後、予備校の出す模範解答速報を見て満点を確信できた時の達成感は今でも鮮明に覚えています。

受験勉強に独創性や創造力の育成を求めるのは無理です。それは大学での学びに譲るべきでしょう。しかし、大学での学びの前提となる基礎知識の習得と論理的思考力を身に付けることは出来ます。これは将来どのような仕事に就いても必要な事項です。しかし、1点差では基礎知識や論理的思考力にどれほどの違いもないではないかといわれればその通りです。違いを観ることは出来ませんが、1点差で合否が分かれるという不条理を回避するために何が必要かを学ぶことが出来るところに受験の意味があると思います。

平成 30 年 1 月 18 日

好文本「企業が変える常識・学校が教えるべき良識」

大手化粧品メーカーが女子高生と商品を共同開発する 10 代向けの新ブランドを発表したという記事が 17 日の日経新聞に載っていました。訪日消費や中高年向けの高額商品が業績を牽引してきたのですが、10 代の消費を拡大せねば成長が失速するとの懸念からです。

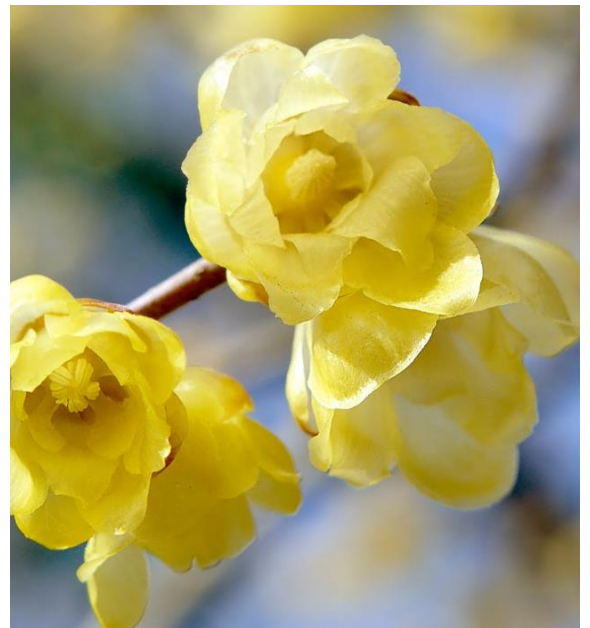
化粧品に関心のある女子高生 150 人の声を聞き、彼女たちが求めるコンセプトやデザインを形にしたそうです。専用通販サイトや雑貨店で目元やほほに色を付けるチップなどを販売するそうです。担当者は「女子高生に寄り添い、アイデアを実現する仕組みを作りたい」と強調しているとのことですが、女子高生に化粧を奨励する企業の飽くなき顧客創造意欲には敬意を表するとともに、学校教育における生徒指導との間における「文明の衝突」が益々激しさを増しそうに思います。

女子高生がお洒落に興味を持つことは当然ですが、その興味を実践する時期を先延ばしにしてきたのが学校教育における生徒指導でした。生徒からは、「先生は髪を染めたり、お化粧をしたり、ピアスやネックレスを付けているのに、どうして私たちはダメなんですか？」という文句に近い質問に、「大人と子供は違う」ではもはや説得力はなく、「高校生は勉学が本分だから、学校に来るのにお洒落は必要ないでしょう」と一歩踏み込んだ説明をする昨今です。

しかし、かつては無色透明であったリップクリームがピンクやオレンジなど色つきになると、それを付けてくる生徒がいます。「口紅と同じになるのでそれはダメ。唇が渇くのなら無色透明のクリームにきなさい」といえば、「ええ〜、そんなの売ってません」という具合。売れるモノを作る企業とそれを禁止する学校のせめぎ合いの構図です。

昨年、大阪の府立高校における黒染が大きな問題となりました。もともと茶色い髪色だったにもかかわらず、校則だからといって黒染を強要され精神的にダメージを受けた生徒が裁判に訴え出たというものでした。生徒側の主張が事実であるとすれば、学校側の対応は目的と手段を混同し余りにも配慮に欠けたものといわざるを得ません。

ただ、この一件をきっかけに、そもそも髪を染めるのは個人の自由であり、黒染を強要するのは人権侵害だというような意見も聞かれました。しかし、学校現場は、良識ある社会人の集まりとは異なり、良識が身についていない生徒もいます。放任すると歯止めが効かなくなり風紀は乱れ学業どころではなくなります。自由を謳歌するためには果たすべき義務や責任そして規律の裏付けが必要です。これをはき違えた薄っぺらな人権論は百害あ



って一利なしだと思います。

企業は利益を追求するもの、学校は良識を教えるもの。企業が商品開発を通じて世間の常識を変えつつある中、TPO を弁える良識を教えるのが私たちの仕事だと思います。そのためにはセンスを磨き納得性のある指導を心掛けねばなりません。

平成 30 年 2 月 2 日

好文本『『人の好文』を目指して』

2 月末に 1 学年が開催する「卒業生講演会」に出席してくれる卒業生の一人が打ち合わせに来てくれました。担当の先生の都合で夕方 6 時ごろ、冷たい雨の降る中やってきてくれました。打ち合わせが終わった後、梅田に出て一緒に食事をしました。

彼女は、専願でデザイン美術イラストコースに入ってきたのですが、途中から個別指導を受けて昨年一般試験で関西大学の経済学部合格しました。美術部にも所属し卒業作品展に出品する絵も一生懸命仕上げていました。食事をしながら改めて入学の経緯を訊きました。

元々、絵を画くのが好きだったところ、中学時代に通っていた塾の先生から本校を勧められたそうで、中学 2 年からオープンスクールに来ていたそうです。彼女の地元には大学も付いている美術で有名な高校もあるので、そちらは選択肢になかったのかと訊いてみました。すると、やはり当初中学校の先生からその学校を勧められてオープンスクールに行ったそうです。沢山の中学生が訪れており盛大なオープンスクールで、美術作品も所狭しと陳列されていたそうです。しかし、彼女には担当の先生の印象は薄かったとのことでした。一方、本校のオープンスクールではコース担当の先生に強く惹かれたといいます。中学校に戻って、本校のコース担当の先生の名前を告げたところ、「その先生がいるなら、好文が良い」といわれそうです。私はこの話を聞いて大変うれしく思いました。



彼女は元々勉強が好きだったといいます。特に数学が得意で、美術を選好しながらも大学受験を考え、放課後の個別指導を受けていました。経済に興味があるというので、私が特進コース 1 年で受け持っていた「やさしい経済学」のレジュメをあげたこともありました。受験は国語、数学、英語の 3 教科でしたが、個別指導を担当してくれたのは 30 代、20 代の若手の教員でした。デザイン美術イラストコースの担当教員も 30 代です。若い彼女、彼らの献身的なサポートが一人の生徒の成長を支えました。とにかく、指示待ちが多くやる気がないと批判されがちな若手層ですが、私は総じて本校の若手教員は良く頑張っていると誇りに思っています。

私の古巣の伊藤忠商事は最近、「ひとりの商人、無数の使命」というキャッチフレーズの CM を打っており、「人を幸せに出来るのはやはり人だ」との思いを伝えています。好文学園の行動基準「それは本当に生徒のためになるか」も、「ひとりの教師、無数の使命」と言い換えることが出来ると思います。またかつて 2 大財閥グループを比較して、「組織の三菱」、「人の三井」といわれたものです。本校においてもさらに風通しを良くし自由闊達な職場環境を確保したいと思います。そしてまた、40 代、50 代がベテランの自覚を持って率先垂範しつつ若手を育てることも肝要です。「人の好文」といわれるような学校にしたいものだと思います。「人を幸せに出来るのはやはり人」なのですから。彼女の話聞きながら心底そう思いました。